

水の文化

アクアツーリズム

水
環
考



橋爪紳也「シビックプライドと地域ブランド」

大隅一志「水文化と結びついた旅」

徳野貞雄「ツーリズムは功罪を超えるか」

小嶋一誠「戦略的な水資源」

金子好雄「手永制度が育んだ肥後人気質」

的場弘行「地下水盆と共存する政策へ」

山口力男「訪れる人と共有する生業の場」

藤村美穂「産業の変遷と景観保全」

水の文化楽習実践取材「ブラックツーリズムのススメ」

シリーズ里川「マイ蛇口を持って深井戸天然水を飲もう」

古賀邦雄 水の文化書誌「熊本の水循環」

水の文化 June 2010 No.

35

アクアツーリズム（水環考）

水は生命の源です。
人が水辺に安らぎを感じるのは、
水の根源的な意味を、知らず知らずのうちに
意識しているからかもしれません。

水が豊かな日本では、
水に親しむことができる場所、
水が育んだ暮らしの知恵や文化、
水が生み出すおいしい食べ物や工芸品といった、
水にかかわる恵みを随所に見出すことができます。
訪ねていけば、
新たな価値の発見につながるかもしれません。

訪れたい人と
訪れてもらいたい人が出会うことで、
元気が生まれる地域が誕生するかもしれません。
たくさんの可能性を秘めた
水にかかわる旅、すなわちアクアツーリズム。
水が取り持つ縁を探しに、出かけてみませんか。

熊本水遺産

熊本市では、多様な水文化を守り伝えるための「熊本水遺産登録制度」を創設し、湧水、食、土木建築、祭り、風習など有形無形を問わず、熊本市の水文化を構成している水資源を「水遺産」として登録している。市民からの公募で、事務局（水保全課）が調査を行ない、熊本水遺産委員会の審議を経て登録される。「水遺産」は熊本市の水文化カタログであり、多様性の証明でもある。2007年度の第1次登録で30件、2008年度の第2次登録で13件、2009年度の第3次登録で17件、現在、計60件の水遺産が登録されている。
熊本市資料、国土地理院基盤地図情報(縮尺レベル25000)「熊本、福岡、大分、宮崎」および国土交通省国土数値情報「河川データ（平成19年）、鉄道データ（平成20年）、道路データ（平成7年）」より編集部で作図

水の文化 35号 2010年6月

特集「アクアツーリズム（水環考）」

水都大阪が引き出した
シビックプライドと地域ブランド

橋爪紳也

4

多様化するニューツーリズムの潮流
水文化と結びついた旅

大隅一志

8

ツーリズムは功罪を超えるか

徳野貞雄

10

くまもとアクアツーリズム

戦略的な水資源

小嶋一誠

14

手永制度が育んだ肥後人気質

金子好雄

18

地下水盆と共存する政策へ

的場弘行

24

訪れる人と共有する生業の場

山口力男

30

景観資源は誰のものか
産業の変遷と景観保全

藤村美穂

32

水の文化学習実践取材
水俣市久木野ふるさとセンター・愛林館の提言

ブラックツーリズムのススメ

編集部

38

文化をつくるアクアツーリズム

編集部

45

シリーズ里川 六地藏のめぐみ黄金の水
マイ蛇口を持って深井戸天然水を飲もう 小金井市中央商店街

46

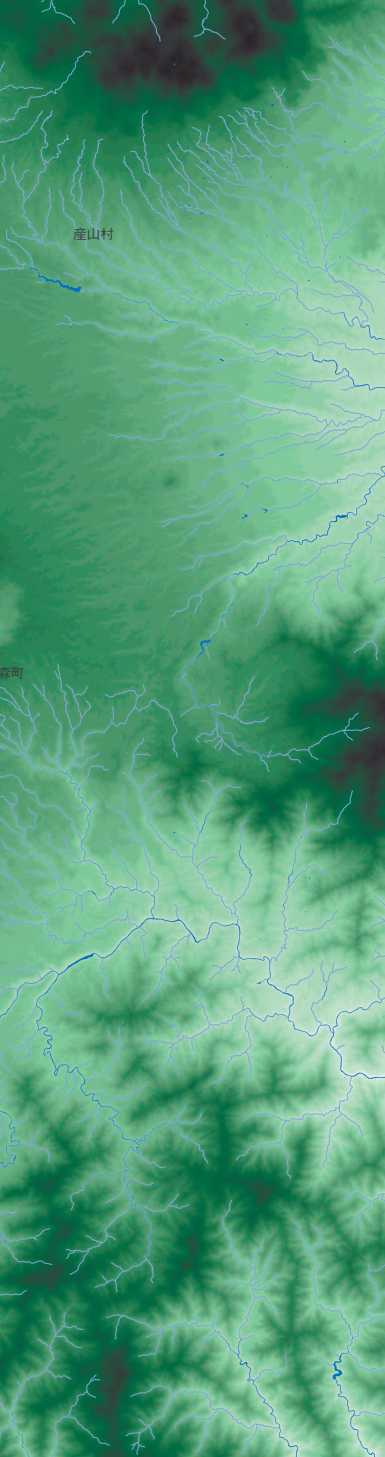
水の文化書誌 熊本の水循環

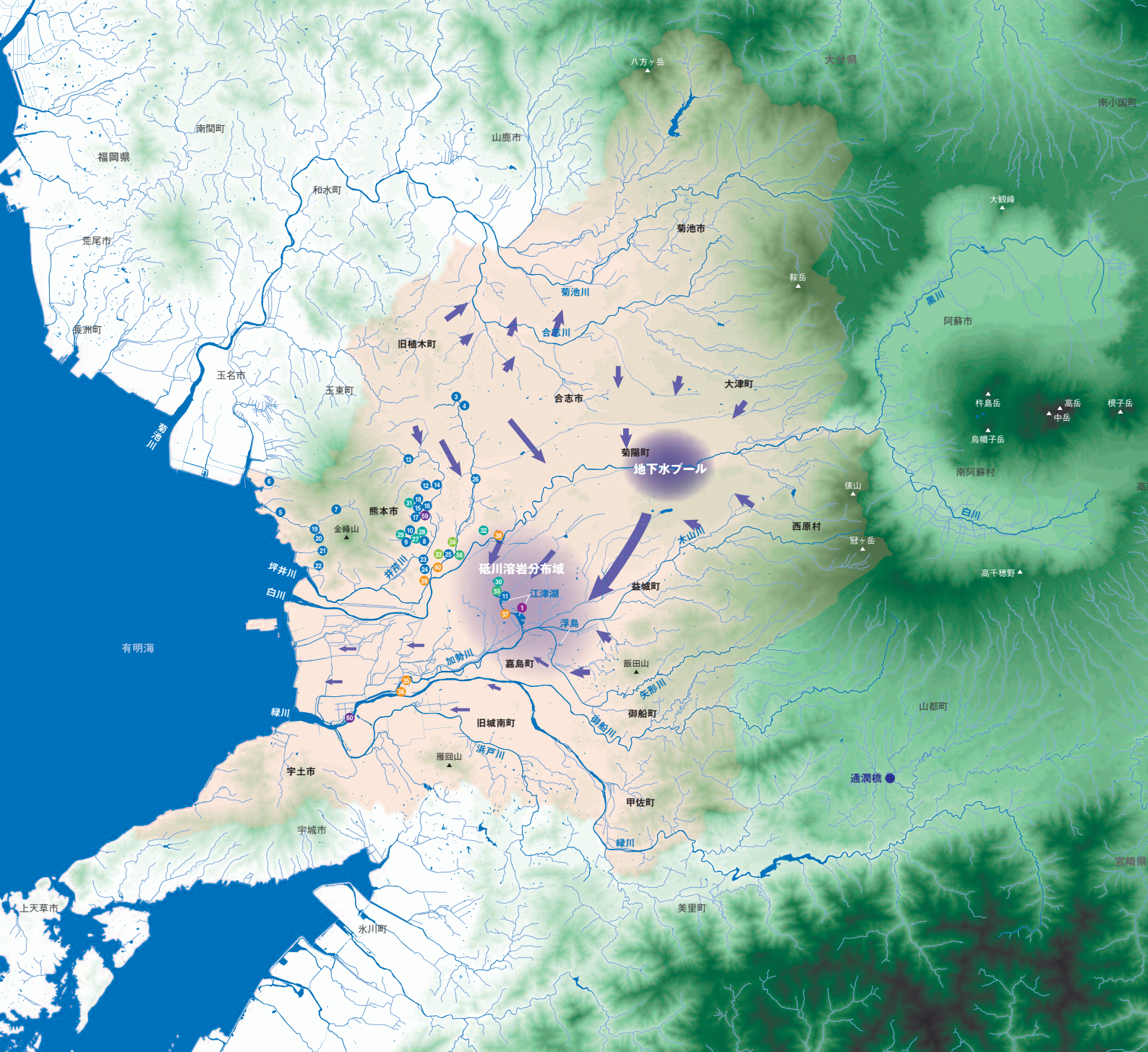
古賀邦雄

48

インフォメーション

50





地下水の流れ

- 水道・水循環
- 湧水・川など
- 庭園
- 井戸
- 土木・建築物
- 祭り・信仰・風習
- 伝統文化・芸術・民謡伝承
- 食・産業
- 地名
- 人物
- 生態系

- 1 健康水源**
市水道の4分の1をまかす最大の水源。11本の井戸の内、7本が自噴。
- 2 熊本地域の水循環**
阿蘇がもたらした大地と清正などの治水整備の出会いが、稀有な地下水盆を形成。
- 3 坪井川源水点「水口」**
地元の人達が坪井川の源流の一つとする湧水地で、河童像が置かれていた。
- 4 小清水の池**
河童にお参りしたお蔭で、溺れて亡くなった子供は一人もいないという湧水の池。
- 5 鐘水**
樹齢600年以上という銀杏の根元から湧き、製鉄に使われた歴史を持つ。
- 6 天水湖**
明治天皇の熊本巡幸時に献上された水で、「天長水」と呼ばれる。
- 7 上川床の湧水**
芳野層(よしのそう)というパームカーヘン状の地層の上部から湧水する。
- 8 長命水**
茶の湯に重宝された名水。長寿の水と伝えられる。
- 9 延命水**
地域の人たちが野菜などを洗う、生活との結びつきが強い湧水。
- 10 少年の家跡**
青少年の健全育成のために、市に寄贈された貴族院議員古庄(ふるしょう)健次郎の別荘跡。
- 11 江津湖**
日量約40万m³の湧水量を持つ市最大の湧水地。環境省「日本の重要湿地」。
- 12 瑞巖寺跡**
奇岩と湧水により風光明媚の地とされる市指定の名勝・史跡。
- 13 太郎迫神社の湧水**
境内から湧水が湧き出す。今も農業用水などに利用されている。
- 14 五丁の妙見さん**
地域の共同水場として古くから利用されてきた湧水。牧歌的な里の行まいが魅力。
- 15 お手水**
神武天皇の皇孫・健甕命(たけむすねのみこと)が手水に使ったことに由来する。
- 16 鳴岩の湧水**
高さ10mの「鳴岩」の割れ目からの湧水。「肥後國史」に、岩中に水流の音がするとある。
- 17 前川の井川端**
地域の人々が「イガワさん」と親しむ、地域共同の湧水の水場。
- 18 天福寺**
細川家歴代の祈願所として知られ、小萩山南麓の湧水が手水場に溢れる。
- 19 鼓ヶ滝**
金峰山カルデラの深谷にあり、景勝地「肥後那馬(なま)やばけい」の見所の一つ。
- 20 雲巖禅寺**
古来より金峰山麓の湧水を寺の水とし、剣豪 宮本武蔵も飲んだという。
- 21 平山(北・南)の湧水**
みかん畑の多い平山地区の生活を支えてきた湧水で、北と南とに二つある。
- 22 いんの川**
覗き込むと砂を踊らせて湧水する様子が見える。今も住民に利用されている。
- 23 産女水**
かたわらに73体の放牛(父の菩提を弔うために107体の石仏を建立した僧)石仏がある。
- 24 四方池の池**
湧水が2坪程の小池をつくる共同の水場。38体の放牛石仏がある。
- 25 熊本城長堀前の坪井川**
加藤清正が、蛇行する白川と坪井川を分離して現在の形にした。
- 26 八景水谷**
3代藩主細川綱利が八景を詠んだことに由来。市上水道発祥の地。
- 27 釣耕圃**
細川綱利がつくった御茶屋が始まりで、米田松洞が「釣月耕圃」と詠んだのが由来。
- 28 養桂園**
再春館の師役村井家の別荘。釣耕圃の水を引いて曲水が流れる。
- 29 三賢堂**
政治家安達謙蔵が精神修養の場として建立。菊池武時、加藤清正、細川重賢の坐像がある。
- 30 水前寺成趣園**
細川忠利がつくった御茶屋と水前寺が端緒。大名庭園に発展し、成趣園と命名。
- 31 成道寺**
熊本の山水庭園の代表格。漱石などの文人・画人からも愛された。なつづき(なつづき)の石燈籠が有名。
- 32 立田自然公園(泰勝寺跡)**
細川家の菩提寺跡。細川ガラシャを祀る「四つ御願」や茶室「仰松軒」がある。
- 33 熊本城の井戸**
加藤清正が朝鮮出兵の苦い経験から、熊本城築城の際に掘った井戸。
- 34 夏目漱石内坪井旧居の井戸跡**
漱石の旧居が残っているのは熊本だけ。長女華子の産湯に使ったという井戸跡。
- 35 川尻の船着場**
川尻は古くからの港町で、その船着場が往時の姿が残っている。
- 36 中無田閘門**
加勢川と緑川を結び開門。「天明ニシバナマ運河」と呼ばれている。
- 37 江津堰**
清正堤ともいわれている堤防。これにより現在の江津湖が誕生した。
- 38 濃鹿用水**
加藤清正が築造したと伝えられる白川水系最大規模の水利施設。
- 39 石壩**
日本最古の分流工事の一つとされ清手が手がけた。
- 40 明八橋**
名工・橋本勘五郎が手がけた石造の眼鏡橋。明治8年に架けられた。
- 41 川尻の精霊流し**
たくさんの万灯籠と精霊船が流される、熊本の夏の風物詩。
- 42 川祭り**
子供の水難防止や水の恵みなどを願う地域の伝統的な風習。
- 43 恵比須まつり**
豊漁・豊作と航海安全を祈願し、港などに恵比寿像を祀る民間信仰。
- 44 水神信仰**
湧水地などに水神様を祀って、水の恵みや子供の水難防止を願う。
- 45 小堀流踏水術**
細川藩の武用水練として宝永年間(たからごころ)に編み出された日本泳法。
- 46 味生池跡及び竜伝説**
奈良時代に肥後の国司・道首首名(みちのみのおびと)がつくったとされる溜池。
- 47 若水**
元且早朝に汲んだ水を若水といい、一家の主人が汲みに行く。
- 48 中村汀女さんの水を飲んだ俳句**
江津湖で生まれ、江津湖を愛した俳人。ホトギス同人。
- 49 壁山南風作「魚楽園」**
熊本生まれの日本画家。故郷の江津湖を描いたもので五幅対の作品。
- 50 水前寺のり及びセイゼンゾリ発生地**
肥後藩が幕府へ献上していた高級品。上江津湖の発生地は天然記念物に指定。
- 51 水前寺もやし**
江津湖の湧水で栽培される、細くて長いもやし。熊本の正月雑煮には欠かせない。
- 52 水前寺せり**
水前寺、江津湖周辺の湧水で栽培される地元の七草の一つ。
- 53 赤酒**
もろみを絞る前に木灰を入れて保存性を高める。「お国酒」として細川藩が保護していた。
- 54 熊本の清酒**
良質な地下水と野白全一(のじろ きんいち)の醸造技術により、高い品質を誇る。
- 55 神水**
上江津湖の北東に位置し、江津湖の清冽な湧水を象徴する地名である。
- 56 水道町**
江戸時代に消火用の水道が通っていたことに由来する。
- 57 檜垣**
水とかかわりの深い物語を持つ、熊本ゆかりの平安時代の女流歌人。
- 58 加藤清正**
土木の神様、治水の神様と称される、熊本の基礎を築いた武将。「セイヨコさん」の愛称。
- 59 成道寺川流域の水域生態系**
希少野生動物植物が数多く生息し、稀有な水域生態系を有する。
- 60 緑川河口のヨシ原**
広大なヨシ原は、動物の棲み処となり、水質浄化の役割も果たす。

水都大阪が引き出した

シビツク。プライドと地域ブランド

近代化の中で、世界の各都市は同じような地域づくりをしてきました。

グローバルスタンダードな都市はできたけれど、

風土とか地域の歴史といった文脈を失ってしまった、

と橋爪紳也さんは言います。

ツーリズムは、単に観光業というビジネスだけではありません。

地域の元気を取り戻し、経済の活性化にもつながる

ツーリズムの可能性についてうかがいました。



イズムを持ったツーリズム

旅行と旅が違うのと同様に、観光とツーリズムは違います。

観光はサイトシーイングの日本語訳です。あくまでも狭い意味で、物見遊山という意味合いが強い。対してツーリズムというのはさまざまな目的で人が移動することの総称です。

特に「イズム」という語尾に注目してほしい。ツーリズムってツアー、すなわち旅行にイズムがつくんですね。これはある種の主義主張を持って人が移動するということを意味します。



橋爪 紳也

はしづめ しんや

大阪府立大学21世紀科学研究機構教授
同大学観光産業戦略研究所所長
大阪市立大学都市研究プラザ特任教授

1960年大阪市生まれ。京都大学工学部建築学科卒業。同大学院工学研究科修士課程、大阪大学大学院工学研究科博士課程修了。工学博士。

主な著書に『倶楽部と日本人』（学芸出版社 1989）、『大阪モダン』（NTT出版 1996）、『集客都市』（日本経済新聞社 2002）、『創造するアジア都市』（NTT出版 2009）ほか

アクアツーリズムは新しい、まだ充分には定義されていない言葉ですが、私は「水を媒介として何かとコミュニケーションをするために、人が移動すること」を総じて語るものだと理解しています。

例えば、大自然の奥にある川の源流を辿るようなものもあるだろうし、海に向くのもあれば、都会的なアクアツーリズムもあるでしょう。

神聖なる水という概念は、世界中のどの民族、文化にもあります。多くの人が聖地に行って、水で身を清めるといった行為がある。噴水であろうが滝であろうが、水辺の聖なる場所は世界のいたる所にあ

るのです。その水にある種の聖なる力があるから、人々は足を運ぶ。それは明らかに単なる観光旅行ではなくてツーリズムなんです。

ボランティアでどこかに行く場合も、観光旅行ではなくてツーリズム。例えば重油が漏れたので海岸の掃除に行きましょう、というのはボランティアなツーリズムですね。川とか水辺をきれいにしようというアクアツーリズムもあるでしょう。

このように、人間にはある種、水を求めて移動しようとする本能があるんじゃないか。清らかな水に対する何らかの想い、水を使ったスポーツ、水を活かした新たな

夕暮れの大阪・中之島。2002年（平成14）リニューアルオープンした国の重要文化財の大阪市中央公会堂（左）の対岸には、水辺に張り出したレストランのテラス席が見える。



楽しみ、水面に落ちる夕日を見て癒されるなど、水には「移動したい」という気持ちを喚起する動機づけが、もともと備わっているから、アクアツーリズムが成立するのだと思います。

水都大阪の場合

大阪で都市再生を考えるとときに、私はどこに焦点を当てるのかということを考えました。ハード整備が都心部の川縁一帯で実施されるということもあるのですが、加えてソフトのプログラムが必要だと考えました。

かつて大阪は水の都だった。ただ戦後の高度成長期の中で、我々は、水の都であったという誇りと対外的に価値のあるブランドイメージを捨ててきた。それをもう一度回復し、かつてのブランドとは違う、新たな物語性のあるブランドとして再構築することが大事なのではないかと。

大阪が水の都だといわれたのは、明治30年代後半（1900年代）から昭和初期にかけての時期。ちょうど近代的な都市として発展をみている段階で「東洋のヴェネツィア」と、市民も自ら語り、外の人も称えられた。大阪の町の美しさを称えました。「東洋のバリ」といった表現で語られることもあ

った。とりわけ大阪の都心部の川沿いには、ヨーロッパの歴史都市と並ぶほどの美しい景色があったんですね。

同時に多くの船が行き交っていました。時代をずっと遡ると、難波津から遣隋使を出していたころから大阪は河川とともに産業、生活を発展させてきた町です。「東洋のヴェネツィア」「水の都」というブランドは、こうした経緯で得たものです。

水の都と同時に産業都市となったので「煙の都」「東洋のマンチエスター」という言われ方も定着するようになりました。大阪の人は「水の都」と「煙の都」、つまり美しい水辺の町であり、大産業界都市である我が都市を誇らしげに語り、多くの人の憧れになりました。それで、もう一度、「水の都」という物語を組み直し、市民も共有して対外的にアピールする、古いけど新しいブランドにしたいと考えました。

杜の都 仙台、華の都 パリなんて言い方は、いつから言われ始めたか知りませんが、数百年も昔からということではない。あるときに誰かがその街の個性として名づけ、流布するわけですね。一言でその街の個性を語るということは、非常にわかりやすいですし、都市の魅力を高め、それによって新

なツーリズムを呼び込むことになり

大阪の場合、中之島周辺部で「水都大阪2009」という事業を行ないました。新しくなった川岸の公園や、ライトアップされた橋梁などに、多くの人に足を運んでいただきました。

大阪の人たちにとって「水の都」というのは歴史的事象です。戦後、順番に埋めていったので、現状が「水の都」であるとは多くの市民は思っていない。過去形です。

「水都大阪2009」は単なるイベントではなくて、大阪は水の都だという物語をもう一度組み立て直し、展開をする最初のきっかけであると、私は個人的に位置づけています。この運動をこれで終わらせないで、市民とともに継続して展開することが大事なのです。まずは水際に来てもらい、意識を変えていただくことが最初ですね。余談ですが、私がタイの工業大臣をご案内したとき、「大阪は東洋のヴェネツィアと呼ばれる水の都です」と言ったらみんなに笑われました。それはバンクコクだろうというわけですね。船もまったく行き交っていないじゃないかということですね。

でも、こういう状況をこれから変えていくのです。水辺を再生する活動をひと事ではなくて我が事

だと思ふ人を増やしていきたい。

近年、広島と大阪だけ河川法の準則が緩和されて、護岸より川側のエリアを民間のレストランや物販で使うことができるようになりました。中之島河川協議会という組織を設立して私が会長になったのですが、地元から「堤防をこういうふうに使いたい」という声が上がってきている。それを受けて、北浜テラスという川に面したデッキのレストランができました。ほかに何か所か、そういった案件を進めています。

ライフスタイルを開拓

水際が復権するには、ライフスタイルデベロップメントが必要で、かつては、水辺での夕涼みや水上の市など、地形や風土に根ざした、その町にしかないライフスタイルがあり、その町らしい時間消費があったのです。そういう生活時間を取り戻せば、水際の活性化ができます。

恒常的に継続するプロジェクトにした好例が、シンガポールです。かつてシンガポール政府観光局は、夜の時間帯のライフスタイルを「ライフスタイルのデベロップメント」ととらえて開発を行ないました。夜だけの動物園、夜に賑わう河川沿いの飲食街、アジアで

最も美しい夜景の創出に力を入れた。それが成功して、町が活性化し、観光客も夜のフライトを利用するようになりました。

自分たちの町を楽しくして、エンジンジョイすることで、結果的にツアー客も楽しめるまちづくりができたのです。

シビックプライドがブランド力を育む

大阪で水をキーワードにしたまちづくりをしたきっかけは、政府の都市再生プロジェクトでした。

私は「ハードができるだけでは、町は再生しないし、新たにできた施設を使う人たちが生まれなければ町は再生しない。人々のマインドの問題がキーになるだろう」と主張しました。

シビックプライドという言葉があります。我が町、我が都市に対する誇りを高めることが大事であると考えます。そして対外的に見て地域のブランドを高めることが大事なのです。内なるプライドと外に対するブランド（発信する力）、この二つが結びついて地域の人々の活動の原点、都市のソフトパワーになります。

今は各都市がソフトパワーを競い合う時代です。近代化の中で、世界の各都市は

同じような地域づくりをしてきました。道路や上下水道、鉄道などのインフラに加えて、博物館が欲しい、美術館をつくりたい、体育館が必要だ、というように、グローバルスタンダードとなる都市をつくってきたのです。

ただ、状況は変わってきた。この何年かで、いわゆる「創造都市」の概念が流布しました。独自の都市づくりを行なうことで、各都市が競い合う状況に入ってきました。従来のように均質に同じようなタワーマンション、同じような駅前広場では、もはや都市としての求心力はない。市民にとって文化的なものや我が町の誇りなどを高めていくためには、ほかの街にはない個性をいかにつくれるか、ということが大事だと思います。そういう町にこそ、多くの人が集まるんですね。

オーストラリア・シドニーのオペラハウス（1973年〈昭和48〉竣工）はできてまだ30年ちょっとでしょ？ でも、もう世界遺産となり、その存在感を示している。価値としては竣工したときから、ほとんど世界遺産です。

世界で唯一、我が町だけにすごいものがある、ということに意味がある。そういうものがあれば、元気がない地方都市も変わることができまますよね。50年後、100

年後に文化遺産になるものをつくり、守っていくことが求められています。

聖なる水辺の例でいうと、広島県の宮島がよいモデルですね。ほかに例がないからこそ価値がある。地方の観光地がそういうもの

新規に創っているかというところではない。成功事例の模倣をし、しかもコピーする度に質がどんどん悪くなっていく。ザラザラして、劣化する。それでは、もう力を持ってないんです。

他所のことをさんざん勉強した上で、他所と違うことをしましよ、と認識しないとオリジナリティは高まりません。そこでは市民の誇りがポイントになります。

だから最初は市民のみんなが驚いて、違和感があつて、ほんとうにこれでいいのかという議論が起きるぐらいの提案がないとパワーが持たない。最初からコンセンサスがとれそうなものは、全然面白くない、と私は思います。

最初はいかに異質なものであつても、後で地域の歴史や文化の文脈に回収されるんですよ。パリのエッフェル塔が建設された際もそうだったじゃないですか。

一部の人の利益ではなく

ツーリズムを目指すからには、

観光業の人だけの利益で満足してはいけません。外から来た人が地元と交流して我が町で活動することは自分たちのプライドを充足させるものだ、とそこの住民が共有できることが大切です。

シビックプライドが充足されれば、シティブランドが高まるのです。例えばフランスとドイツの国境にあるストラスブールでは、かつて物資を輸送する船が往来した水路があり、その運河が観光対象になっていきます。町のいたる所で水に対する物語、川に対する想いを耳にしました。よく母なる川とか言いますよね、マザーリバー。その川がなければ我々は存在しなかった、という点は、どんな都市にも共通しているところなんです。

ところが、日本では母なる川とは、あまり言いませんよね。川には良い面と悪い面がある。災害との戦いがつきまとう。そここのころはヨーロッパの諸都市も一緒のはずなのに、川への愛情面において違いが出てきたところに、暮らすと水辺の結びつきの弱さがあるのかもしれない。

仕掛人が必要

世界遺産のフランス・セーヌ川の左岸では、夜景をどうするかというガイドラインがあります。行



「水辺は悪所でもある」とは、当センターのアドバイザー 陣内秀信さんの名言。ネオンサインに人が引き寄せられるのは、猥雑な活気を生み出す悪所に、あらい難い魅力があるからだろうか。

政はパリのセーヌらしい照明器具しか使わないし、明るさも他の道とは変えている。セーヌから夜のモンマルトルをどう見せるのかをパリ市がコントロールしています。ところが我々日本人には、川から自分たちの街がどう見えるかを真剣に考えて、美しくすることが大事だという感性がなかなか育たないですね。

同様に夜の川辺の景色をきれいにしようなんて想いは、ほとんどありません。だから夜景のガイドラインすらない都市がほとんどでしょう。その中で、島根県の松江には夜景のマスタープランというのがあります。夜の掘割をどう見せるのか、というガイドラインがあるんです。

これはアクアツーリズムではありませんが、大阪の宗右衛門町の例をお話ししましょう。かつては料亭街でしたが、今はすっかり風俗街になって治安も悪くなり、それでイメージアップを図ろうと地元で地区協定を結びました。

対岸の道頓堀にはかつては劇場がいくつもあって、「ここに来れば何でもある」という芸能のメッカだったのです。宗右衛門町は芝居町を控えた街になる。しかし劇場街の変化に応じて、かつての老舗もビルに建て代わり、テナントだらけになったことで、地域の特

性が失われてしまいました。

テナントビルだけでは盛り場は魅力的にはならない。どんどん入れ替わるし、町を良くしようとする愛着が湧かないからです。宗右衛門町ではそうした風潮を是正する意味もあって、電柱の地下埋設、舗装の石畳化など、さまざまな取り組みを始めています。

つまり、いくら良いものを持っていても、時代の変化に適切に対応していかないと、風土とか地域の歴史といった文脈を失ってしまう。宗右衛門町ではそれに気づいて、巻き返しを図っているところですよ。

一番大切なのは、仕掛けとプロデューサー的な人材でしょう。その上で、利害関係にある人たちがミッションを共有して、地域のブランドとプライドを高める運動を進めることができれば、多くの地域で新たなツーリズムの創造が可能になると思います。

日本には、豊かな水資源があります。随所にアクアツーリズムの素地は充分あるのですから、可能性は高い。

そこで問われるのは、地域のオリジナリテイをどう見出し、いく



多様化するニューツーリズムの潮流 水文化と結びついた旅

価値観や旅行への要望の多様化に伴い、着地側から発信される旅行商品が増えています。

従来のマスツーリズムに比して、ニューツーリズムは多品種小ロット。ニーズは増えてきているものの、マーケティングなどに課題を残し、苦戦中です。

ニューツーリズムの現状と、ブランディングに貢献する水を、観光資源として検証しました。

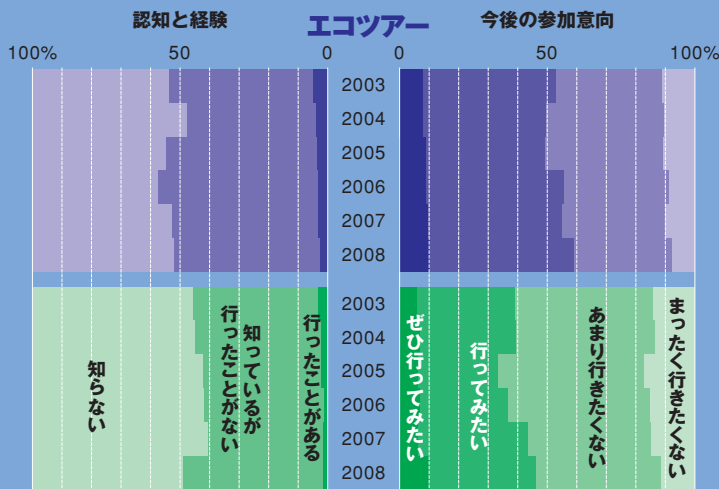


大隅 一志

おおすみ かずし

(財) 日本交通公社 観光調査部主任研究員

1982年、(財) 日本交通公社入社後、各地の観光地計画、リゾート計画などにかかわる。1990～91年、アメリカ・コロラド州立大学にて研修（米国のアウトドア・レクリエーションの実態などを調査）。1997年より主任研究員。日本観光研究学会会員
主な著書に『観光読本』（(財) 日本交通公社編／東洋経済新報社 1994）ほか



グリーンツーリズム

特定の旅行スタイルの経験と参加意向

(財) 日本交通公社「旅行者動向2009」をもとに編集部で作図

発地側から着地側へ

(財) 日本交通公社は、観光文化振興のために調査研究、研修を行なう公益法人として現在に至っています。

スキー場開発、リゾート開発から始まり、バブル経済崩壊後はオートキャンプ場など自然志向の観光開発をしてきました。現在の傾向としては、どこから観光で、どこからまちづくりなのか、領域がボーダーレス化し、「観光まちづくり」が大きな流れになりつつあります。

(財) 日本交通公社は、1912年(大正元)ジャパンツーリストビューローとして誕生。旅行部門は1963年(昭和38)に、(株)日本交通公社(現・(株)ジェイティービー)として分離された。

新しい旅行志向としてニューツーリズムの概念が生まれてきました。

ニューツーリズムを定義するのは難しいですが、旅行テーマだけでなく、マスに対応できない内容を持つているということ。流通の仕組み自体もニューなのだと思います。

従来型の観光モデルでは、旅行商品は発地側の旅行会社が、大量に宿泊や交通手段を仕入れて不特定多数の人に売るといふ、マスツーリズム型の効率のいい旅行をつくってきました。

こうした売り方は、発地側からお客を送り込むことから「送客ビジネス」ということができます。

こうしたマスツーリズムが地域に与える影響は大きく、今は批判されることがあります。しかし個人で手配するよりも安く安心して利用できる

るメリットがあります。つまり、旅行が大衆化する段階では、非常に有効なビジネスモデルだったわけですね。

一方、マイカーが普及し、インターネットで情報が安く手に入る時代になり、個人が自ら旅行を計画して手配するようになってきました。団体旅行、マスマーの形態から、個人旅行にシフトしてきました。

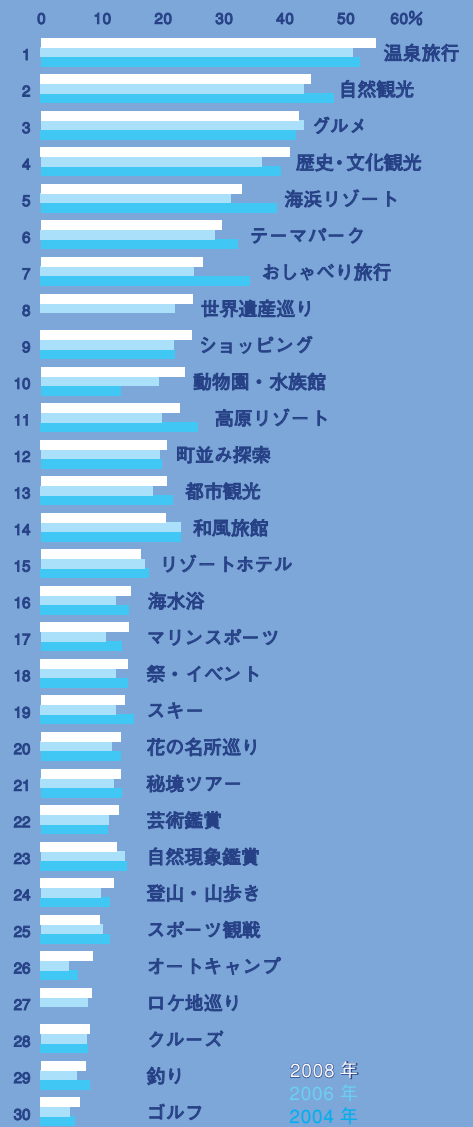
ちなみに現在の個人旅行と団体旅行の割合は、費用負担で8割、形態の9割が既に個人です。修学旅行以外は、ほとんど個人旅行といっている状況です。

送客ビジネスに対して、集客ビジネスとしての「着地型旅行」という言葉も定着しつつあります。地域側が、自ら旅行商品をつくって売れる形態です。これは多様化するニーズやニッチな要望に対応できる素材や魅力を、地域で発掘して旅行商品として売っていくというものです。

こうした商品を少しでも開発していかないと、これからの旅行業は継続できませんが、発地側の旅行会社には、その情報が集まりませんから商品開発する力がない。それで着地型旅行が目玉されてきたのです。

しかし着地型旅行商品の一番大きな課題は、流通の仕組みがないことです。お客さんや旅行業者が、目的に合った旅行内容や目的地を探して予約・手配、あるいは取引ができるプラットフォームをつくることは、解決策の一つ。必要性は理解されていて、観光省などがそこに注力しているところですね。

2007年(平成19)に観光省は着地側旅行を普及させるために、第三种旅行業の取り扱い範囲を国内の募



行ってみたい旅行タイプ

(財)日本交通公社「旅行者動向2009」をもとに編集部で作図

集型企画旅行まで拡大しました(ただし隣接市町村の範囲のみ)。これにより着地側で旅行業を取得する動きが活発になっていきます。

さらに観光認定地域では、旅館やホテルが旅行業者代理業として、着地型商品を旅館やホテルで売ることができるようになっています。

旅行商品のタイプ

着地型旅行商品の販売の方法は大きく分けて二つあります。一つは直販。もう一つは、発地側旅行会社を通じた卸販売です。

旅行会社の扱う主要な旅行商品は企画旅行。これには、パッケージツアーと呼ばれる募集型企画旅行と、教育旅行に代表される受注型企画旅行の二種類があります。グリーンツアーリズムとか体験型旅行で成功しているのは、受注型企画旅行で、ある程度の収益を上げているところですが、

消費者の嗜好変化とニューツーリズム

体験へのニーズは、とても高まっています。旅行雑誌『るるぶ』(JTBパブリッシング)も、かつては「見る・食べる・遊ぶ」の「るるぶ」だったのですが、「食べる・体験する・学ぶ」の「るるぶ」に替わってきています。

観光サービスも、今は二極化しています。至れり尽くせりのサービスに普段味わえない非日常性、贅沢気分を感じる人もいれば、放っておいてくれ、という人もいます。

旅行商品の難しさというのは、購入時には目に見えないことです。電化製品なら目に見えるし、性能もわかり、価格の妥当性も判断しやすい。しかし旅行商品というのは、経験しないとわからないし、人によって満足度が違います。しかも返品がきかない。

私たちは、全国の観光資源を評価した台帳を持っていて、富士山クラスの国際的な誘致力を持った特A級からA級、B級、C級というレベルで、自然資源と人文資源を分類しています。

マーケティングの不足

求める市場はあるのに売れないのは、多くの場合、地域の側にマーケティングの視点が不足しているからでしょう。

今までの地域発型の旅行は、部材をバラで売っているんですね。例えば湧水だけを見せる、というようにです。おいしい水で淹れたコーヒードリンクを飲ませるとか、水と触れ合う空間

を用意するとか、多様な側面から地域の体験に付加価値をつける工夫はほとんど行なわれていません。

エコツーリズムやグリーンツーリズムのもう一つの課題は、地域側の契約窓口が弱いことです。

観光協会が担うようにはなっていますが、まだ弱い。受け入れ地域側が一元的な窓口をつくって、そこに問い合わせればコーディネートして、契約もしてくれ、今よりももう少し広域に対応できる窓口をつくる必要があるでしょう。

新潟では越後田舎体験協議会というところが、複数の市町村をまとめてそういうことをやっていますし、長野県地域では飯田広域で南信州観光公社という第三セクターをつくっています。ここは旅行業の第二種まで持っています。

こういう窓口を地域でつくって、長野県地域では飯田広域で南信州観光公社という第三セクターをつくっています。ここは旅行業の第二種まで持っています。

地域の暮らしとつながる水

私は今、観光地が環境への取り組みを誘導する仕組みづくりに取り組んでいるんですが、その中で発見したことがあります。

普段から環境に意識が高い人たちに、「観光地で環境に取り組んでいる所があったら、取ってそこを優先しますか」という質問をしたんです。答えは二つに分かれたのですが、高額でも環境への取り組みに積極的な地域を選ぶ、と答えた人の中に「子供がアトピーだから」という回答が多くあった。

抽出したのは40人ぐらいですから統計的なことはいえませんが、このようなマーケティングがあることに気づきました。水は健康と非常にかかわりが強いので、そういう需要には武器になると思います。

新たな概念であるアクアツーリズムを定義するのに、水の景勝地やアクティビティなど多様なシーンが挙げられますが、私は「水とかわる暮らしや文化とつながる旅」ということが、一番大切だと思います。

地域の生活や文化、産業とかかわる水というのは、地域の観光と切り離せない重要なものです。これは地域の個性を引き立たせるのに、とても有効です。水を媒介にしてつながる人間力は、地域のブランドを高めるのに役立ちます。岐阜の郡上八幡などは、水があるからこの町の魅力があるんだなあ、と実感しますね。水は地域のトータルティを増すための要素なんです。

旅行者の価値観や嗜好の中で、水は欠かせない存在であることは間違いないと思います。ただ、水は集客においてメインテーマになりにくいのです。メインテーマではなくて、地域の魅力を高めるために間接的に水が役立つ。ブランドイメージの基調になっていく、ということなんです。

地域のブランドイメージにつながるから、その地域の生産物の価値も上がる、といったように波及効果が高まる。水には、このような貢献の仕方があるのだと思います。



ツーリズムは功罪を超えるか

受け入れ側にとっては地域活性化、訪れる側にとっては日常からの解放として、期待を集めるグリーンツーリズム。

しかし「スローライフ」は忙しく、「グリーンツーリズム」は落とし穴だらけ、それ自体は反対でないけれど、と徳野貞雄さんは慎重論を提示します。

今までの失敗は、旧来のパラダイムに固執したことにある、だから、突破口となる新機軸の構築が、農村（ムラ）にも都市（マチ）にも求められています。



徳野 貞雄

とくの さだお

熊本大学文学部 総合人間学科 地域社会学教授

1949年大阪府生まれ。1987年九州大学大学院文学研究科博士課程修了。山口大学、広島県立大学、シェフィールド大学客員研究員を経て、1999年より現職。「食」と「農」の専門家として、日本全国の農村に出かけ、フィールドワークをこなす活動派。「道の駅」命名者。

主な著書に『ムラの解体新書』（林業改良普及双書 1997）、『地方からの社会学—農と古里の再生をもとめて—』（共著／学文社 2008）、『農村（ムラ）の幸せ、都会（マチ）の幸せ—家族・食・暮らし』（日本放送出版協会 2007）ほか

役所とマスコミのためのグリーンツーリズム

マスコミは、

「都会の暮らしがイヤになって山の中で農業をしています。収入は3分の1になりましたが、ここは自然も人情も豊かです」というネタが大好きです。

しかし、農家の息子が、農業を継いで記事にはしません。

日本の行政は、国も県も、もはや農村をどう活性化したらいいか、わからなくなっています。だから、取り敢えずグリーンツーリズム。それで議員と役場職員が、農家民宿のメッカ大分県・安心院に視察に行く。これでは、役所とマスコミのためのグリーンツーリズムです。

私は、基本的にツーリズムに反対ではありません。ただ、農水省的な政策として、グリーンツーリズムによる農山村の活性化目標を立てていっても、そんなに短期でうまくはいかないだろうと考えています。

もっと基本的に、時間がかかってもいいから、いろいろな形で農村対策を展開していくべきでしょう。農山村活性化IIグリーンツーリズムという、政策的なシングルフォーカス（画一化）が、一番悪

ろしいのです。

目的は何？

厳しいことを言えば、ブームとして追いかけるのではなく、グリーンツーリズムにどんな効果があるのか、もう少し現地的、実証的に研究する時期にきているのではないのでしょうか。少なくとも、自分たちがやっている都市農村交流は「政策」なのか「事業」なのか「活動」なのかという性格づけが必要ですよ。

熊本県の山都町のY集落では、7年前から棚田オーナー制を始めて、地域起こしの優良例として、たくさんの方の表彰状をもらっています。都会から150〜200人のオーナー希望者がくれば農地は守れると考えたそうですが、実際に棚田オーナーになったのは21組でした（現在は18組）。この集落の水田は54haあります。オーナー制で都会の人が耕したのは34a、全水田面積の0.6%です。これでは棚田保全にも農業の担い手にもなり得ないでしょう。そして、都市農村交流に、集落の人は「疲れ果てて」しまっています。

しかし私は、棚田オーナー制はやめないほうがいい、と思っています。なぜなら、それは「新しい祭り（活動）」だからです。そう

考えれば、赤字でも腹は立ちません。このように、都市農村交流の推進は、漠然とやるのではなく、目的や機能を明確にして進める時期にきているのです。

農山村の暮らしは、人口とか、経済とか、集団の関係性とかが複雑に絡み合っているのですから、過疎対策や農村活性化というのは、すんなり解決策が出せる問題じゃない。

例えば、熊本の郷土料理の馬刺。「熊本は阿蘇があり、馬刺の文化があったから、ふるさと料理は馬刺」という。一昨年熊本県で生まれた馬は38頭で、馬刺用に落とされた馬は7600頭。ほとんどがカナダ産の馬です。都会から来た人は「自分がふるさと料理の馬刺を食べたことで、馬の生産者は潤って、阿蘇の草原が守られる」と思うのは勘違いもはなはだしい。

一方で、熊本県にたくさんいる赤牛の畜産農家には、何の手も差し伸べられないから、後継者対策も進まない。牛の値段が下がってやっていかれない。何のための「ふるさと料理」「都市農村交流」なのか。

こういうことを「アグリツーリズム」とか言ってやってきた。だから、僕は素直に賛成できない。慎重であるべきでしょう。

阿蘇北外輪の山麓から、満々と水をたたえた田んぼの風景を望む。2000年におよぶ歴史を持つと伝えられる阿蘇神社には、健甕龍命（たけいわたつのみこと）を中心に12の農耕神が祀られている。神話の時代から、阿蘇では稲作が行なわれていたという。



パブリックとはなんだ

景観問題も同様です。日本の景観を一番最初に壊したのは、行政です。戦後、役場を率先して鉄筋コンクリートにした。行政関係の支所、病院、学校など、全部そういう建物にした。そして人の心の中に「ヨーロッパ式のコンクリートの建物はカッコいい」という価値観を植えた。

一番問題なのは、日本式建造物の基本構造を行政自身が壊しておいて、まったくそれに気づいていないまま、景観だ、まち並み保存だ、とやりだすことです。

イギリスの田園地帯は美しい。地域で景観の統一美を守っている。それは行政だけじゃなくて、コミュニティで守っている。家を建てるときにはコミュニティが勝手バラバラな家を建てさせない。そこにはパブリックという概念が強く存在する。

この概念のルーツの一つはキリスト教の教会です。

もう一つは、疫病対策です。18世紀、19世紀に都市に人口が集中したときに、都市部はペストなどの疫病にさらされた。疫病というのは、貧富の差がない。王様だって貴族だって、流行ったら死ぬ。ばい菌もウイルスも知らない時代

には、どうやって防ぐかわからないが、人が集中して住んで汚くしていたら起こる、ということは体験的にわかる。

それで建物の大きさ、高さだけでなく、形態や素材の質まで規制する力を持った。それがパブリックです。

20世紀の日本の都市開発は、公衆衛生に神経質にならずに済んだ。同時に、デベロッパーが勝手に商業主導的な開発をし、儲けていくのを阻止できない。その最たるものが、スプロールしていく都市計画と農村の田んぼの中にある看板です。

留学していたところに、イギリスの阿蘇国立公園みたいな所に行って、地域開発の計画書を見せてもらった。章立てになっていて1章から20章ぐらいまである。この章の順番には、どういう意味があるの、と聞いたら優先順位だということ。第1章が「空気と水」だった。驚いた。ギャフンとなった。なんで「空気と水」が一番なのよ、と質問したら、あんたは馬鹿か、これがなかったら人間は生きていけないだろう、と言われた。

2番目が「土と緑」。3番目が4番目がたしか「歴史と文化」。このあとに、道路や建物云々がある。日本だと環境保護と開発は対立

関係にありますよね。イギリス人は対立構造ではなくて、入れ子構造とらえている。デベロッパー（開発）という言葉の中に、コンサベーション（保全）が入っている。哲学が違うんです。

人口交流論の落とし穴

低成長時代になって、成功者たちや経済界のリーダーたちは、昔へ戻ろうと言い出した。「昔の夢よ、もう一度」である。「坂の上の雲」や「龍馬伝」を見よ、という。ああいう番組を見て、日本人の真面目さを思い出して再発展しましょう、と思うのでしょうか。

しかし過去の成功事例の目標しか持っていないで、新しいパラダイムがつかれないままやったら、おそらく失敗するでしょう。

僕が想定している新しいパラダイムは、縮小論。これからの日本は、人口減少を前提とした将来像をどう描いていくかが、最大の課題になります。

それなのに、政治家も大学の先生も、ほとんどの人は人口が増えないと地域や社会がだめになると思っています。

幻想でもいいからと、人口増加政策を求めます。旧・国土庁は過疎・過密問題を解決しようと三全総（1977年（昭和52）に閣議決定され

た旧・国土総合開発法に基づく第三次全国総合開発計画・田園都市構想）や四全総（1987年（昭和62））を、旧・自治省は過疎地特別措置法をつくり、旧・通産省は農村工業導入政策を進めました。でも、地方の過疎化、高齢化は止まりません。

そこで苦肉の策というか、居直りというか「定住人口がだめなら交流人口」と考えだされたのが、「都市農村交流人口論」です。

交流人口論は、人口1万人の町に100万人の交流人口がきたら、町はずごく活性化するというところに立脚しています。しかしそれには落とし穴があって、100万人がその町にいるのは1日だけ。しかもその人たちは、床屋にも病

院にも学校にもスーパーマーケットにも行かないし、交流人口の増加で潤うのは、土産物屋、旅館、タクシーなどの一部の業種にすぎません。

町の住民は365日×1万人×365万人です。だから都市農村交流型経済活性化論は、経済的サギ論だということです。

人口増加型パラダイム

からの脱却

日本は、明治時代の3500万人の人口を1億2700万人まで増やして、その人口増加をベースに経済発展を成し遂げた。無茶苦茶な人口爆発型の国だったのです。

今、この弊害が出てきています。一つは環境・エネルギーの問題。

農村の若者を都会に連れてきてバラバラにしたら、労働力にもなるし、転勤も簡単にさせられる。ムラや家族が持っていた機能を、専門、分業化して、貨幣でもって赤の他人に依存する、という生活様式をつくれれば消費者もつくれます。ところがムラは機能的共同体という側面も持っている。

会社でサビ残業をするのも、ムラの苦役の延長です。他社とのシェア争いに徹夜で働くのも、隣ムラとの水争いと同じです。共同体の生き残りのために、サラリーマンは会社でもムラと同じ働きをするのです。

ムラが壊れるということは、単に農業や農村が衰退していくというだけではありません。日本人が、日本社会が持っている機能的共同体が、弱体化することなのです。

エネルギーだって、鳩山さんはCO₂25%削減と言ったけれど、バラバラに住んでいる人間が一緒に住むようになればすぐに達成できる。正面切ってアプローチしたのでは無理。発想を変えなくては。

ハウスレスでなく ホームレスが問題

もう一つの弊害は、人間どうし

の関係性が稀薄になったこと。

みんな間違っているのは、一般にホームレスといわれている人たちは居住する家のない「ハウスレス」ではなく、家族や知人との人間関係を喪失した「ホームレス」なんです。

だからハウスレスは救えるけれど、関係性を喪失しているホームレスは救えないんです。

普通に生活しているように見える人たちの中に、ホームレスがものすごく多い。その人たちを切っけしてしまっているのは、人間関係資本を極度に縮小した現代社会です。人口をベースに経済発展させるというモデルは、もう通用しない。坂の上の雲を見つめて歩いていたら、「坂の上の崖」だったんです。

密飼いからの解放

都会には人間が多すぎるから、社会的関係性を拒絶しないとやっていられないのかもしれない。あまりに近づきすぎたら危険を感じる。それって、動物の本能ですよ。

僕は去年、鶏インフルエンザをきっかけに、過密問題を研究していた。

科学者は証明できないことは絶対に言わないけれど、厳密には証

明できないことも世の中にはたくさんある。鶏インフルエンザも証明されていないけれど、100万羽養鶏なんていうことをやったら、病気が起こる確率が高くなるのは当たり前です。突然変異でウイルスが変わっていく病気だから、10羽や100羽飼っているのと100万羽飼っているのでは、ウイルスの変貌の速度も桁が違ってきます。だから基本的に家畜の密飼いが原因で、人間の密飼いのダブル密飼いによって、インフルエンザは広がっていくんです。

昔は密飼いじゃなかったから、風土病で数十匹死んでも、宿主が死ぬとウイルスも死ぬから被害がそこで止まり、パンデミックにならない。

じゃあ、なぜ100万羽も飼っているのかといったら、それは産業資本主義の都合でしょ。そこを放っておいて、ワクチンが効くか効かないかを論じたって、結論は出てこないですよ。

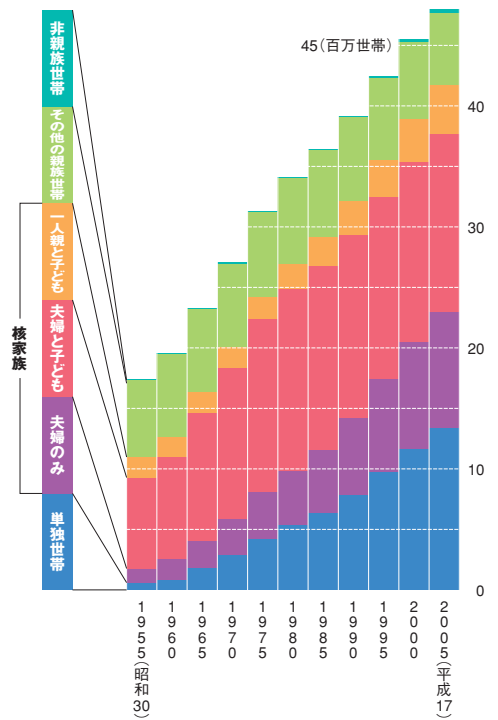
家族と地域の価値

人間の集団には、目的がある集団とない集団がある。

家族とムラには目的がなく、存在が先にある。逆に目的があったら困るんです。結婚して、産まれてきた子供が目的に合わないか



急斜面につくられた棚田に引かれる水は、勢いが強い。水の勢いで土が掘られぬよう、竹樋の末端には節が残されている。



家族類型別世帯の割合 (普通世帯)

内閣府「国民生活白書 平成 19 年版」より編集部で作図

らとって「私は知りません」とは言えないのが家族。家族がなぜ一番安心できるのかは、単純な話です。赤ちゃんが泣いたらおっぱいを吸わせておむつをかえる。そういう行為の積み重ねなんです。好きとか嫌いとか感情で家族になるわけじゃない。

関係性には、家族が果たす役割が大きいけれど、地域の働きもある。

このごろ子供の虐待が多い。そういうことは昔からあったけれど、最低限の保障をじいちゃん、ばあちゃんや隣近所がやっていた。だから子供は死ななかつた。だめな親の数は、昔も今も同じぐらいだけれど、それを保障するシステムがなくなつたから、子供が死んでしまう。

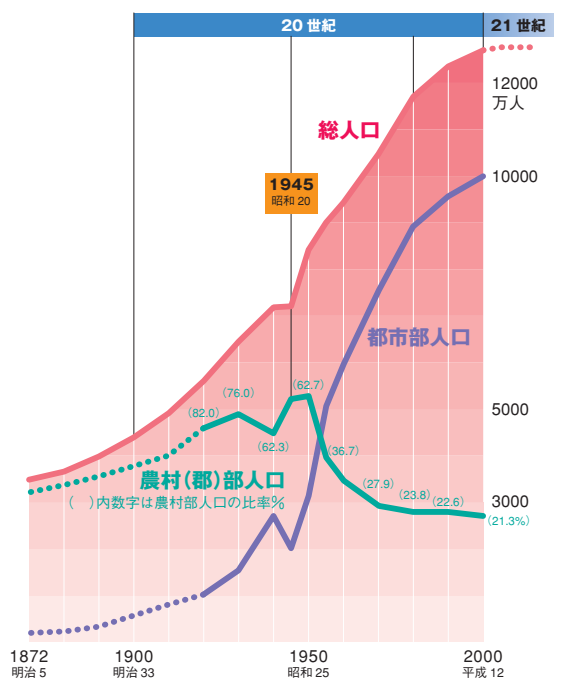
未熟な親をどうするかということも解決しなくちゃならないけれど、家族・世帯の在り方や、隣近所の関係性を高めることも大切です。

知らない仲じゃなし

アクアツーリズムという言葉は、よく知りません。どれぐらい都会の人を動員できるのかも知りません。

ただ、「みんな、つながりたいんだ」という気持ちはわかります。しかし、それをやるための基盤が、もう崩壊している。

僕が今考えているのは、個体識別ができる人間の集合体をつくらないだろうか、ということ。室町時代から後のムラというの



明治以降の日本の人口動向

『農村の幸せ、都会の幸せ』徳野貞雄 (NHK 出版 2007) をもとに編集部で作図

は、小字と大字の連合体。だいたい200から300の戸数で400から6000人。この範囲内で、日本人は生きてきた。互いに個別に知っていた。

山も水も、この人数だとなんとか自律できる。それより外は、他所の世界。ときには水争いの対象です。

人間は知っている仲と知らない仲とでは、行動様式が変わる。だから個体識別ができて一定空間の中で、どれだけの間関係をつくれるかが、地域再生の突破口の一つになる。

これが、アクアツーリズムの可能性への、答えかもしれない。

ただ、行政やメディアが見せるイデオロギーとユートピアの虚偽には警戒しなくてはいけない。「大変だったけれど、貧しくても助け合っていた」とかね。

そういう話がみんな大好きなんです。それを悪用する人がいて、何度も騙されて疲弊している山村があることを、都会の人にもっと知ってもらいたい。

まずは、受け入れ側の地域の基盤と、訪れる側の関係性を再生しなくては。ニューツーリズムを語るには、それから先のことだろうと思います。



くまもと アクアツーリズム 戦略的な水資源

熊本地域では豊かな地下水資源を戦略的に保全・活用することを目的とした行動計画（熊本地域地下水総合保全管理計画）を作成しました。

上水道としての活用はもとより、観光資源として、また農林水産物から工業製品に至るまで、水とのかかわりを「物語」にして、地域の魅力を対外的にアピールしようとしています。優れた水資源を保全し活用するために設置された水の戦略会議の試みは、全国的に注目を集めています。



小嶋 一誠
おしま いっせい

熊本県総務部市町村総室長

1952年、熊本県出身。熊本県市町村合併推進室長、交通対策副総室長、行政経営課長、水環境課長を経て現職。

主な論文等に、「熊本地域における地下水管理行政の現状」（地下水学会 2010）、「市町村合併の現状と課題について」（熊本を創る情報誌STEP 2005）、「市町村合併への取り組みについて」（自治フォーラム 2002）ほか

「熊本の水資源をうまく活かしているよね」と言われるように、豊かな水資源の保全と活用についてのコンセプトを共通目標に、関係機関が同じ意識で仕事を進めていこうと。特に、今回の取り組みでは、「水の宝庫熊本」の水ブランドづくり、磨き上げを目指しています。

県内の大河川は、北から菊池川、白川、緑川、球磨川。それ以外にも筑後川、大野川、五ヶ瀬川、大

「熊本つて、素晴らしい水の宝庫で、水資源をうまく活かしているよね」と言われるように、豊かな水資源の保全と活用についてのコンセプトを共通目標に、関係機関が同じ意識で仕事を進めていこうと。特に、今回の取り組みでは、「水の宝庫熊本」の水ブランドづくり、磨き上げを目指しています。

熊本には、約千カ所を超える湧水源がありますが、特に熊本地域（市町村）は、約100万人の生活用水の100%を地下水でまかなうほど、豊かな地下水資源に恵まれた地域です。

世界的に水資源が枯渇傾向にある中で、水の宝庫である熊本県としては、水質や水量の保全対策だけに止まらず、活用にも新しいコンセプトを打ち出していく。

熊本には、約千カ所を超える湧水源がありますが、特に熊本地域（市町村）は、約100万人の生活用水の100%を地下水でまかなうほど、豊かな地下水資源に恵まれた地域です。

行政機関だけでなく、水問題の研究者や経済団体や環境団体などの代表など、さまざまな立場の人が参加して、意見を出し合っています。ミツカン水の文化センターのアドバイザーを務めておられる東京大学の沖大幹先生にも加わっていただいています。

熊本には、約千カ所を超える湧水源がありますが、特に熊本地域（市町村）は、約100万人の生活用水の100%を地下水でまかなうほど、豊かな地下水資源に恵まれた地域です。

この会議は、熊本県の豊かな水資源を戦略資源としてとらえ、健全な水循環と水環境の保全及び、活用方策を考えるフォーラムとして設置されました。

熊本には、約千カ所を超える湧水源がありますが、特に熊本地域（市町村）は、約100万人の生活用水の100%を地下水でまかなうほど、豊かな地下水資源に恵まれた地域です。

国内旅行先ランキング

「旅行者動向 2009」(JTBF)をもとに作成

写真は江津湖最深部の池（17ページ上の写真）から流れ出た小川。熊本は都市の真ん中に湧水減がある。



淀川などの源流も抱えています。

こうした水に恵まれた熊本で、近年、水のマネージメントがより重要な課題とされ始めたのは、熊本地域における地下水位の低下や硝酸性窒素濃度の上昇などの問題が顕在化したことによります。

地下水の宝庫熊本でも、将来にわたって、地下水を持続的に利用するためには、地下水を涵養し、地下水質汚染を防止する積極的な対策が必要となったからです。

県と熊本地域11市町村で構成する「熊本地域地下水保全対策会議」が2009年（平成21）2月に策定した、熊本地域地下水総合保全管理計画（行動計画）によると、地下水量は涵養域の減少などが続き漸減していることが指摘されています。年間6億m³の涵養量という現状を維持するだけでも、あと7300万m³程度を新規に涵養することが必要となっています。さらに地下水採取量については、2024年（平成36）までに今よりも10%程度抑制し、年間1億7000万m³とすることとしています。

水質保全についても、モニタリングをしているすべての観測井戸で、硝酸性窒素濃度を環境基準値以下（10mg/l）にすることを掲げるなど、厳しい目標を立てています。この管理計画は、タイムテーブルに達成目標を掲げた具体的

な行動計画を伴っています。こうした行動計画は、おそらく全国でもあまり類を見ない取り組みではないかと思えます。

行動計画の中には、「熊本版水のISO制度」といった面白い話も出ております。レストランやホテルの三つ星ではありませんが、工場や事業場における水循環や水環境保全に真剣に取り組む企業などを審査し評価する仕組みをつくらせて、水に優しい企業のステイタスとして世界基準に持っていこうという提案です。

行動計画では、地下水保全のために地下水採取を抑制するという観点から、新たに、許可制の導入といった条例化による規制強化についても検討されています。

ここでは、熊本の地下水は県民すべての共有財産、公の水であるという「公水概念」、そして地下水にかかわるすべての関係者は、良質の地下水を享受する権利とその涵養に自ら参画する責務を有しているという「育水概念」を理念として掲げて検討が進んでいます。行動計画に基づく地下水の総合的な対策を進めるために、行政と民間が一体となった新たな推進組織をつくりまします。推進組織を動かすための財源については、水道事業者や大口の取水者などに採取量に応じた一定の負担をお願いする

仕組みづくりについても検討しています。

次世代を育成

熊本県民の水に対する意識の高さを端的に示すものの一つに、国土交通省と県が主催する「中学生の水の作文コンクール」というのがありますが、熊本は8年連続で日本一の応募数を誇っています。勉強や部活などで忙しい中、昨年度は、約5200人の子供たちが作文を書いてくれました。全国

の応募数が1万6000件ぐらいなので、3分の1強は、熊本県の子供たちなんです。熊本の中学生は約5万人。その中の5000人が水について考えて作文を書いてくれています。2番手の県で約1000件程度。誰も書いてくれなかったという県もありました。

昨年の国土交通省の会議で「何で熊本県は5000件も集まるのですか。審査も大変でしょうし、募集や審査の秘訣を教えてください」と説明を求められました。コッなんかありません。熊本では担当者が1人で5000件の作文を2週間程度で読み上げた上で、さらに独自の審査会などを開催して一生懸命審査します。作文の中で、気がついたことの一つに他県から来られた多くのお

子さんが、「親から学校の水道の水は飲んじゃいけないと言われて育った。学校に行くときには水筒を持たされて、家では買ったミネラルウォーターを飲んでいる。だから熊本に来て、友だちが水道の水を蛇口からがぶ飲んでいるのを見てびっくりした。友達に聞いてみると『熊本の水は蛇口から出ているのは全部地下水よ、なんでミネラルウォーターを買っているの？』と言われた」という話がよく出てきます。

水道水などにそれだけ余計な気を使っている他県で、水の作文コンクールに応募する子供たちが少ないのはどうしてでしょう。逆に熊本では、水環境への問題意識が強い。たぶん、地下水への依存度が高いからだと思えます。

子供たちの姿を見ると、水の宝庫熊本には、水に優しい、水を大切にしている風土があることに気づかれます。そして「次世代に健全な姿で水資源を引き継ぐことが重要」という意識が醸成されている。水の国に根づいたそうした風土を、私は「水のエートス（倫理的習慣）」と表現しています。

熊本が持っている最大の資源、宝が水資源です。特に、地下水はかけがえない県民の共有財産として、これを守り、育て、活かして、そして磨き上げて将来世代に引き

継ぐ必要があります。

世界的に水資源が枯渇傾向にある中で、そうした理念や取り組みこそが戦略であると思います。そうした観点からも、水の作文コンクールに表われている熊本の子供たちの意識には、大変力強いものがあると思っています。

活用が地域保全につながる

環境保全はもちろん大切ですが、ただ守っていくという意識では守りきれない面があります。豊富な地下水を守るために、人々に保全を義務づけたり、規制を強化するという発想ではなく、地下水が持っている多面的な価値というものを、もっと最大限に引き出すことを考えていく。できればその価値を経済化するという視点も含まれます。

例えば、熊本特産のスイカは全国的に有名ブランドですが、銀座に持っていったら、「ただのスイカじゃありません。熊本の宝、地下水で育てたミネラルウォーターメロンです」という付加価値のつけ方ができないか。値段が多少高くてもミネラルウォーターで育ったスイカを買って食べてみたい、というニーズも出てくるのではないのでしょうか。

水の戦略会議でも最初に活用の

話が出た際には、「活用よりも保全が重要。活用というのは地下水を売ることですか」という反応もありました。しかし、よく考えてみると、人は自分に役に立つものでないとなかなか真剣に守っていくという行動にはつながらないものです。せっかくの名水でも、今は「これが名水なの？」という所も散見され始めました。その背景には、過疎化や高齢化の進行があります。耕作放棄地で農業水利が必要なくなった所では、結局、水源そのものも荒れてしまっただという例もあります。

湧水源は、集落の基盤です。水源を守れなくなったら、集落そのものも成り立たないでしょう。こうした意味において活用という視点も重要だと思えます。しかし、活用を考えると売るのは水をベクトルに詰めて売るということではありません。水の持つ多面的な価値を発見し、磨き上げ、自分たちにとって有用なもの、人々にとって興味のあるものとするのだと思えます。

ツーリズム

熊本は、阿蘇山を始め全国有数の観光地を擁しています。熊本の

に来て「水の宝庫」という新しい魅力を堪能していただきたいです。

熊本には水の名所がたくさんあります。次は、見えて回って、泊まると、次の湧水源まで行ってみる。豊富な水資源を有する熊本として、多面的な付加価値の活用方法となる、そのようなツーリズムの提唱などを考えています。

名水や湧水を訪ね歩いて魅力ある時間を過ごしたり、山奥の湧水源で清冽な湧水を飲む。民宿に泊まって、湧水が育んだ農産品や、地元の水産物に舌鼓を打つ。地域でつくった味噌、醤油、豆腐、酒、焼酎、野菜すべてが湧水でできているわけですから、そこで水の結晶のすべてを召し上がっていただく。

しかし正直に言いますと、今までは湧水源がツーリズムの対象や地域づくりの資源になるなんて、あまり考えていませんでした。

ただ、水をテーマとしたツーリズムも湧水源をちらっと見て20分ぐらいで次に行ってしまうのでは、地元は何の経済効果もありません。せつかく湧水源を訪れてくれた方々をもてなすための宿泊拠点などを近くにつくる。拠点も一つだけでは求心力がないので、その拠点をコンセプトで新たなツーリズムを提唱しよう。そういうコース

が県下の随所に増えてきたらいいな、というのがこの構想です。

ツーリズムの「イズム」をどういう風に考えたらいいか、というのが肝になります。「イズム」で表現するのはそこにいる人たちの暮らしとか文化。その中で自然と共生した生き方が成熟しているのを、外の人が見て素晴らしいと思うようなことが、ツーリズムといったときに大切になるのです。

地域に暮らす人々が大事にする、大切にしていることを誇りに思う。ただ水源がある、というのではなく、そこで生活している水守人のライフスタイルが重要なのです。なぜなら、暮らし方というのは、他所では絶対に真似ができないことだからです。

でも、地域の中に住んでいる人は、まだ、それに気がついていない。あまりにも当たり前だから気がつかないのです。豊かな水資源を宝物だとも思っていないし、思っていないから湧水源が廃れてきたり、地域が寂れてきたりする。

熊本の湧水源には、それぞれに、その水源で暮らしてきた人々の歴史文化があり、故事来歴も残されています。人々が弥生の昔からそこに住んで水を大切にしながら命を紡いできたという「物語」の掘り起こしが必要です。

水というのは、地域文化の揺籃の源なんです。すべての源泉。その命の泉の中で私たちが今も生きていくこと、そこでは当然に環境に優しいライフスタイルが求められる。自然と共生した素晴らしい暮らしがある。それを体験できる。そうしたツーリズムを都会の人にも、もっとアピールし、地元の皆さんは誇りに思ってもらえればいいわけです。

暮らしとの歩み寄り

しかし、地元の人には日々の暮らしがあるので、大切にしている湧水源に他所の人があんまりたくさん来てもらっちゃ困る、という思いもある。だからこれまであまりアピールや宣伝をしていません。おおかたの地域はそういう状況です。

しかし、そうした考えで将来的に地域や湧水源を守っていくかといったら、そうではないと思います。過疎が進む中山間地域は、そうした考えでは大切な湧水源も守っていきません。大切なものを守るためには、保全と活用というソフトウエアが必要なんです。来訪者のマナーというのは、これから充分啓発できることだと思います。

アクアツーリズムによる地域活性化というのは、あくまでも湧水源の保全、その前提となる地域の暮らしを前提とした構想です。経済的観点からの観光地づくりを目指しているわけではないという点が、他のツーリズムとは理念的に少し違うところ。何か特別なことをして見せるのではなく、ありのままの姿で湧水を見て、飲んで、地元の人々に感謝しながらまた次の湧水源に行く。湧水源を見ると、そこに暮らし人々の暖かいハートに触れることができる。そのことで自分も心豊かになれる。そうした資源を持っていることが地域にとっては誇りになるはず。そうならば訪れる人はマナーを充分わきまえてくれるんじゃないでしょうか。

地域にとって大切なものを守る。そのためには水に優しいライフスタイルとか水に優しい考え方というものが重要。そうした理念が湧水源地域のエートスになって、その地域に持続的に根づくことが素晴らしいんじゃないかな。要は、それが根づくかどうか、ということなんです。熊本県は地下水の宝庫であり、豊富な水の恩恵を今は享受しているけれど、いつまでも地下水の宝庫であり続けることができるかどうかはわか



もとは湧水の豊富な湿地帯であった江津湖は、加藤清正が江津塘を築いたことにより現在の形になったといわれている。美しい風景は芸術家に愛され、多くの絵画や短歌、俳句に表現された。一時期は汚染が進んだというが、下水道の普及によって水質は改善された。上江津湖と下江津湖があり、上江津湖は特に豊富な湧水に恵まれ、スイゼンジノリの発生地がある。囲いがあるのは、天然記念物に指定されているためだ。上は、カワセミの飛来を待つカメラマンたち。



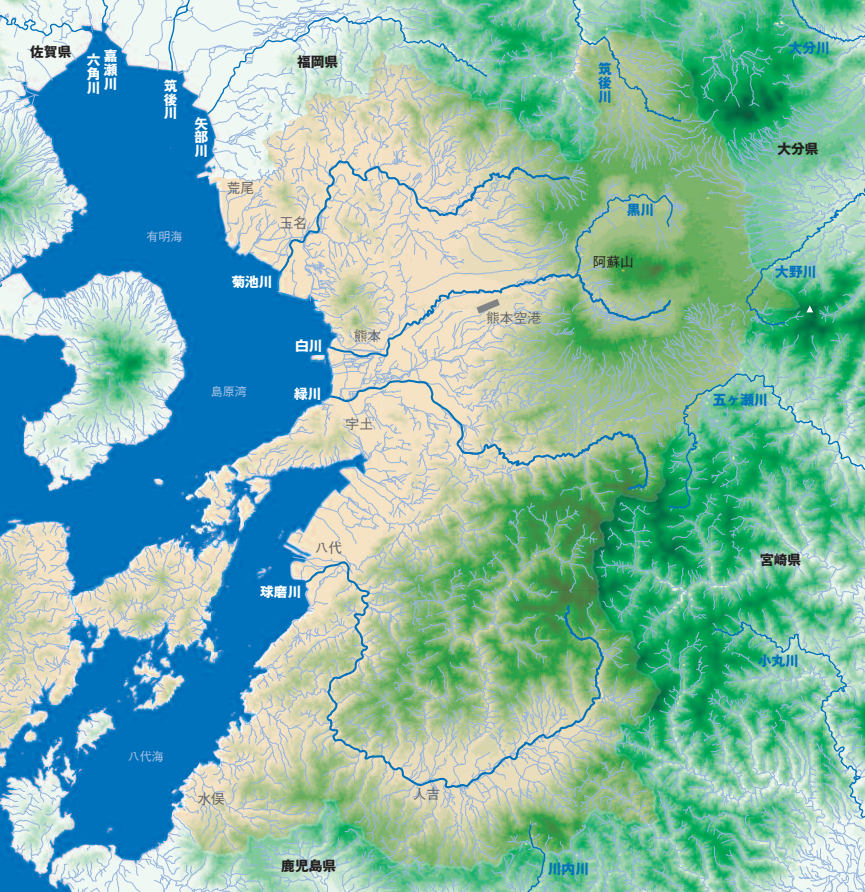
らないわけで、そのためにも先人が育んできた水のエイトスの復興が必要だと思います。

かつて健康政策の分野で、健康をすべての政策の基礎とするヘルスプロモーションという動きがありました。健康な社会、健康な経済、健康な行政。健康という概念をヘッドポリシーにして社会のあり方を考えていこうという動きです。こうした考えと同様に、私たちの生活、ライフスタイルというものを「水環境に優しいかどうか」という観点からもう少し見直し、そうした価値判断を意志決定の上位に置くようになれば、水環境問題は大きく改善されると思います。私は、多少こじつけではありますが、それを「ウォータープロモーション」と言っています。

私たちの社会や暮らしの基盤は水であることは明らかです。水資源が枯渇したり、汚染されれば代えるものがない。すべてが影響を受けます。

そうした意味において、水は戦略的な資源です。その恵まれた資源をいかに保全し活用できるかが、熊本県にとって、今、重要な課題となっています。





地図：国土地理院基盤地図情報(縮尺レベル25000)「熊本、福岡、大分、佐賀、長崎、宮崎、鹿児島」および国土交通省国土数値情報「河川データ(平成19年)、鉄道データ(平成20年)、道路データ(平成7年)、標高・傾斜度細分メッシュデータ(昭和56年)」より編集部で作図

熊本の豊かな水は、「水使いの仕組み」と「肥後人氣質」をも育んできました。持続可能な開発が求められる昨今、「肥後人氣質」が力を発揮する時代が到来したように思います。ツアーがツーリズムに昇華するために、まずは熊本の歴史をひもといてみましょう。

くまもと アクアツーリズム 手永制度が 育んだ 肥後人氣質



金子 好雄

かねこ よしお
東海大学産業工学部環境保全学科 准教授

1951年東京都大森生まれ。1978年東海大学大学院工学研究科修士課程修了。東京理科大学理工学部助手、九州東海大学工学部都市工学科講師・助教授を経て現職。専門は水環境工学。

主な著書に『熊本発地球環境読本』(共著/東海大学出版会 1992)、『科学と環境教育』(共著/東海大学出版会 1993)、『水環境工学の基礎』(共著/森北出版 1994)、『くまもと水防人物語』(共著/積書房 1998)、『日本の水環境7 九州・沖縄編』(日本水環境学会編/技報堂出版 2000) ほか

熊本との出会い

私は、実は生まれも育ちも東京です。大田区の大森なのですが、ちょうど私が育ったころの多摩川は公害が一番ひどいころだった。生物はまったくいない。いるのは背中が曲がったような魚。堰から落ちる水が泡立って、風にちぎれて飛んでいるようなすごい風景の所で育ったんです。そんなとき父が多摩川上流に連れて行ってくださいました。それで、川って良い所もあるんだなというのを知りました。それが川との出会いです。

私は土木工学出身で、飲料水をつくる上水道工学と下水処理をして環境に還す下水道工学が専門でした。熊本に来てからは、これまで下水処理で微生物を扱っていた関係で、工学的なもの以外に保全生物学、あるいは保全生態学、生態系保護論といった科目も担当するようになりました。

熊本を流れる大きな川に、白川があります。1994年(平成6)から年1回の調査をやっている。今年で17年目です。白川は本流が74km、黒川という支流を合わせる100km弱あります。

この規模の調査をやるには、人

手がいります。全学から希望者を募って、大体3kmおきに31のポイントをとって採水し、生物調査も併せて行なっています。1カ所で最低4人必要ですので、31カ所で124名以上、大体今まで150名から180名規模で実施してきました。

1985年(昭和60)から熊本にありますが、素晴らしい水環境の所です。町の中に湧水があり、73万人の熊本市民の上水道をまかっています。日本ではこの人口規模では多分唯一、世界でも珍しいことに、水道水源が100%地下水なんです。地下水を水道水源に



5月22日12時から23日20時までの総雨量（アメダス速報値）は、熊本県阿蘇市阿蘇乙姫で316mmに達した。写真は、23日夕方の嘉島町付近の様子。左が水路で中央が道、右が田んぼだ。東京モンには驚きの風景だが、地元の人には慣れているのか平然としていたことに二度ビックリ。



使っているのは全国でも20%強ぐらいですかね。

また、浄水場もまったくありません。熊本に来て浄水場を見に行ったら、施設も何もないのです。「何にもないの?」と聞いたら、大きな水井に連れて行かれて、水がぼんぼん湧いている。「これ、自噴です」と言われてびっくりしました。この水を濾過もせず、塩素消毒だけで利用しています。水質がいいのでそれでいいんです。

ところが熊本の人、良い水が豊富にあるから、貴重さをあまりわかっていないことが多い。転勤や進学で県外に出て、初めて熊本の水の有り難さを知った、という人が多いですよ。

戦国時代の熊本

この地域は昔、加藤清正が肥後の国主になって治めるまでは、五十二人衆と呼ばれる地方ごとの国衆（在地領主）が頻りに争い合っていて、どうもまとまった川の整備ができなかったようなのです。それで、この辺りでは米がつかれませんでした。

九州を統一した豊臣秀吉は、佐々成政を肥後の領主に任命しました。佐々は、五十二人衆に対して検地を強行します。この支配に反旗を翻した五十二人衆によって、

1587年（天正15）肥後国衆一揆が起りました。佐々は責任を取って切腹、この争いを記念した国衆祭りは400年以上経った現在も続けられています。

この後、肥後国の北半分が加藤清正に、南半分が小西行長に与えられました。しかし、加藤家は1632年（寛永9）に忠広の代で改易になったため、それまでの資料は残っていません。ですから、白川の治水については、はっきりしたことがわからないのです。

また、白川の南を流れる緑川の治水についてもほとんど資料がありません。緑川はもと小西行長の領地ですが、行長は関ヶ原で敗れて刑死し城も落城しているため、小西家の記録も残っていないのです。関ヶ原の合戦以降、この領地は清正に与えられました。

一方、加藤家に続き肥後を治めた細川氏は、永青文庫を残しているように資料を見事に残しています。そういうことで歴史家の研究は、大体100年から150年後に書かれた資料に基づいているんです。工法とか工事の仕方で年代を判断しているようですが、古い仕事やみんな清正が行なったことか、というとはわかりません。

しかし、熊本人は加藤清正最良（せいりょう）さんのお蔭」にしてしまう傾向があります。

向があります。

手水制度

細川氏が行なった政策で一番興味深いのは、手水制度でしょう。

手水制度とは、郡奉行の助役でその地域の実質的な統括者である惣庄屋を手水に任命し、政治、経済、軍事を、いわば民間に委託して行なわせたものです。村は手永の下に置かれ、小庄屋（村庄屋）が地方を統治しました。細川忠利は肥後の前任地である小倉時代から、こうした制度を導入しています。

8代目の重賢が1747年（延享4）領主に就いたころには、幕府からの出費や工事の負担要請によって細川藩は窮乏しており、重賢は1752年（宝暦2）に「宝暦の改革」を実行しました。このころから、藩は手水制度を一層進めて、地方行政に直接かわからないようになりまし。民間にやらせることで予算を節約する代わりに、利益が出たら手永会所という役所に蓄えることを許したんです。その管理は惣庄屋が行ないました。橋をかけるのも、そうして蓄えた資産を利用してやっています。

熊本県内には石橋が多く、今でも300以上あるといわれています。全国の石橋の約6割が、熊本



にあるといわれるくらいです。それらをつくったのも、藩ではなくて手永なんですね。それも、一人の偉人や有力者がつくったのではなく、地域がつくったんです。これが熊本のごいところだと思えます。

熊本の中央に位置する美里町（旧・砥用町と旧・中央町）文化財保護委員長の長井勲さんからうかがったのですが、岩野用水（美里町岩野地区）の岩盤開削に際し、石を割るときに火薬を使っているんです。火薬は戦争に使う道具という印象が強いですから、民間が火薬をどこから手に入れたのかと思いますよね。今の佐賀だったか福岡だったかに対馬藩の飛び地があつて、そこで火薬を買ったという記録が残っています。

手永が育んだ肥後人気質

手永制度がうまくいって、困窮していた細川藩は、うんと豊かになりました。肥後は、関ヶ原以降^{おもて}表石高は54万石でしたが、裏高は75万石といわれていました。それが1800年代半ば前（天保年間）になると、菱田勝彦さんの研究によると、取れ高は200万石ともいわれて大変豊かになります。だから天保の飢饉でも実質、餓死者を出してない、おそらくその当時

の日本では珍しい状況だった。だから、熊本は明治維新が必要ではなかった、数少ない豊かな藩だったんです。

しかも面白いのは、豪商とか豪農が出ないことです。熊本には「肥後の引き倒し」という言葉があつて、誰かが突出してくると足を引っ張るという気質があると言われます。しかし、よく考えてみるとネガティブな意味ではなく、突出して豊かではないけど突出して貧しくもない、みんな中間的というか中間層的というか「みんなが豊か」という珍しい状態をつくったのではないのでしょうか。

美里町にある岩野用水も、江戸末期の1845年（弘化2）に中山手永によってつくられた用水です。この惣庄屋は、矢島忠左衛門という人です。

ちなみに忠左衛門の娘の内、三人は肥後の三猛婦と呼ばれる女傑です。

六女は梶子^{かじこ}といい、社会事業家で禁酒、廃娯の婦人矯風会を創立し、国際的に活躍しました。もう一人は徳富家に嫁にいった四女の久子で、徳富蘇峰、徳富蘆花兄弟の母親です。残る一人は、横井小楠に嫁いだ五女のおせ子です。

横井小楠 よこいしやうなん
(1809-1869年)
幕末の政治家・思想家。統一国家の必要性か

ら、鎖国体制・幕藩体制を批判。それらに代わる新しい国家と社会を、公共と交易の視点から模索した。外国との通商貿易をすすめる、自律的な経済発展のために産業の振興を説く。小楠の考え方は、保守的な考えの強かった熊本では受け入れられず、招聘により訪れた福井藩や幕政改革に大きな功績を残す。新政府に参与として出仕するが、1869年（明治2）攘夷論をとる十津川郷士らによって、京都で暗殺された。

肥後は保守的で横井小楠を受け入れなかった、といわれていますが、この時代に娘をこういう女性に育てた惣庄屋がいたので、単に保守的だっただけではありませぬ。

岩野用水の取水口は、釈迦院川と白石野川の合流点にあり、白石野川側に堰堤^{えんてい}を設けて水位を上げることで取水していましたが、どうしても流量が不足しがちだったため、釈迦院川の上流に別の水路を掘削して、白石野川の取水口の上流側左岸に導水することで水量を補っています。

私はこれを見て、人間の知恵ですごいなど感心しました。こうしたことは全国的に見ても珍しく、文化遺産としても貴重なものだと思います。

通潤橋も

手永が手がけた仕事

阿蘇が噴火して火砕流が流れ込み、溶岩と火山灰が蓄積して溶岩台地ができました。熊本の水道の



右2点：上益城郡御船町上野にかかる八勢眼鏡橋。江戸時代、熊本と延岡を結ぶ日向往還は、ここから矢部に通じていた。渓谷は深く、増水すると通行ができなくなるため、1855年（安政2）御船の木倉手永で酒造業も営んでいた林田能寛（よしひろ）が私財を投じて架橋。石工 卯助、基平兄弟が通潤橋の次に築造した、長さ62mに及ぶ県下で最長の石橋。

上と左：熊本市西唐人町にかかる明八橋（上）と明十橋。ともに坪井川にかかる橋で、築造者は皇居の二重橋をかけた橋本勘五郎であるとされ、築造年が明治8年と10年であるところから命名。



発祥地は八景水谷（はつけのみぞ）という所にありますが、ここも台地の外れの崖下、つまり崖線（かみづら）上にあります。空港がある高遊原（たかゆばる）も、通潤橋がある白糸台地も同様です。

断面図で見ると、カルデラがある、外輪山がある。北外輪山に沿うように流れてきた黒川と、南外輪山に沿うように流れてきた白川が合流して、外輪山の切れた所阿蘇からの唯一の出口である立野火口瀬から白川として流れ出しています。黒川の由来は、火山灰を多く含んだ黒く濁った水だから、といわれています。熊本では火山灰のことをヨナと呼び、海へどんどん流れるものだから、河口付近はすぐ埋まってしまうため、なかなか河口に港がつかれませんでした。

白川の南を流れる緑川は名前の通り周りの山々の緑が映えて美しいんですが、白川流域はあまり木々に囲まれていません。なぜなら、火山灰台地上を流れているからです。火山灰土は普段は浸透性が良く、いいようにだけ、雨が降りすぎると崩れます。すると川の水が、高密度で破壊力の強い泥流になって、まさに土石流のようになります。白川は熊本市街中心部では天井川（てんじょうがわ）になっているので、九州で水害がもっとも恐れられている川の一つでもあります。

熊本はわかりやすく言うと、台地状に島みたいになっているんですよ。まわりの低い所には川が流れているんだけど、台地の部分は高くなっているから、水が取れなかつたんですね。それで台地上では米がつかれなかつた。

通潤橋は、阿蘇外輪山の南西側の裾野、上益城郡山都町（やまと）（旧・矢部町）にあります。

橋からの放水が有名になっていますが、実はポイントは用水路なんです。要するに白糸台地に灌漑用水路を整備するために、必要上つくられた水道橋です。

もう一つ興味深いのが、石垣で組まれた橋台、鞘（さや）と呼ばれている部分です。これはデザイナーではなくて、下の地盤との関係でどうしてもこうして組まないと本体を支えられなかつたからつくられたんです。なにしろ、石橋としては日本一の23mという高さですからね。

この技術は、武者返しといわれる熊本城の石垣からヒントを得たといわれています、見事なアーチを描いています。

1854年（嘉永7）に通潤橋ができたことで、それまで水が得られなくて米がつかれなかつた白糸台地に、灌漑用水を引き新田開発することが可能になりました。ちなみに九州では用水路のことを井手（いであ）といいます。通潤橋も藩が作ったのではなく、この地域の惣庄屋（そうしやう）だった布田保之助（ふたやすけ）という人が中心となつてつくられました。

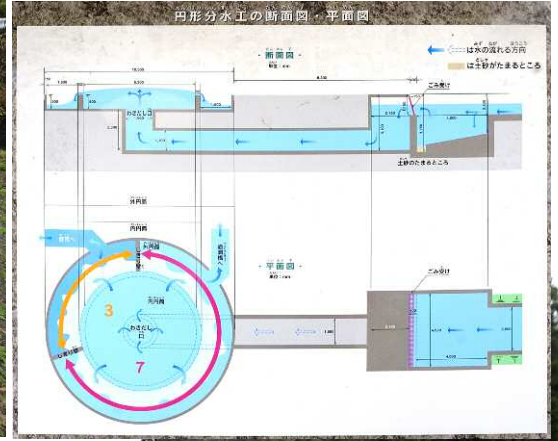
当時の用水は、農業用水としてだけではなくて、生活用水としても使われました。文献を見ると「用いる水」ではなくて「養う水」になっているんです。用水とはつまり養う水なんだと。

まさにそれは言い得て妙だなと思います。人を養い、牛馬を養い、田畑を養い、作物を養うという意味を含ませて養う水としたんだろう。私は、それが人間の生活を養っているところから、さらに文化をも養っているという風に思っています。

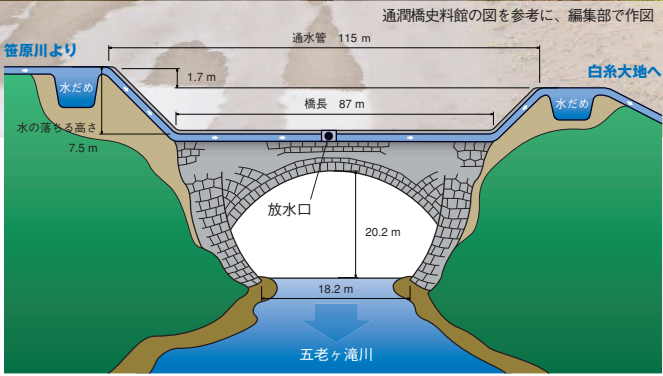
砂蓋（さぶた）

用水路は維持や管理も必要です。例えば、水を配る配水方。近代土木工学では、水路というのは標高の高い所から低い所に、片勾配（かたこうばい）でつくと教えられてきました。ところが、この時代には逆勾配（さかこうばい）でつくっている箇所もあります。トータルでは順勾配（のりこうばい）で高い所から低い所に流れているんですが、平べったいVの字型につくり、Vの底に砂蓋（さぶた）をつくる。

多分、江戸時代はいろいろな用途があつたんでしょうけど、V字の底の所に切り欠きをつくって、角



右上は熊本県上益城郡山都町に設置された環境省の説明看板



落としのように堰板をはめておき、これを取れば田んぼの中に水を入れるときにも使えます。

水が取れるようにしておけば下に柵田もつくれますし、生活用水もとれます。

逆勾配をつけておけば、大雨が降ったときに一気に負荷がかかることを防ぎますから、水路が壊れることが軽減されます。泥が溜まりやすくなるから、ここから泥を流すことも容易になりますね。こうした多様な機能があるんじゃないかと思うんです。

ここには砂蓋を見張る水番、砂蓋番がいて、自分の所に我田引水する人がいないように、開け閉めを管理して

いました。水の量はイコール米の量ですから水がなければ米はできない。だから畑や水田に水をいかに確保するかというのが世界中でも非常に重要なことです。

円形分水の知恵

その大切な水を分けることが、いかに大変だったかを視覚的に見ることができているのが、円形分水です。これは近代になってから考案されたものですが、文句が出ない公平な分け方を思案の末に考えた、という感じがします。通潤橋の上流につくられた円形分水は、1956年(昭和31)につくられ、笹原川から取水された水を野尻・笹原地区と白糸台地へ3対7で分水して送り出しています。これは大変な知恵ですね。

水をちゃんと分けるといことがいかに難しかったか。水の配分が悪いと、血の雨が降る、というのは生活がかかっているからです。

川と共生する工夫

白糸台地では、今も農業用水の管理をしています。しかし、管理の様態も変わってきました。地域はこれからどうやって維持しようかと考えていて、通潤用水と白糸台地の柵田景観が2008年(平成20)7月に国の重要文化財景観の指定を受けたことを活かして、観光客が歩いて見て回れるようにすることで、ツーリズムを利用した用水の管理ができないかという



ことを考えています。

岩野地区に住んで岩野用水を管理する人も、一番若くて60歳代です。用水の管理は、もう10年もたないんじゃないかと言われる地域がたくさんあります。雨が降るときに見回ったりとか、草刈りとか、大変なことがたくさんあって、高齢化は大きな問題です。

また、熊本の地形はフラットなので、歴史的に見ても、川は結構暴れ回っています。どう制御するかといえば、力づくで自然に逆らってみても、所詮、人間はかなわないという事実が根底にあると思います。私も、学ぶべきはそこだと思います。

もう5、6年前に土木学会も認めましたけど、結局自然の力と持続的に向き合っていくためには「防災」ではなく「減災」だよ。

熊本人の知恵なのか、細川氏の統治能力のすごさなのかわかりませんが、熊本ではその辺のことを非常にうまくやってきたんです。

川の本堤の外側などに御救恤開おきゅうかいというものがたくさん行なわれました。御救恤とは困った人などに救いを恵むことです。

洪水になって水がくる場所、つまり本堤の外にある遊水池を、普段は御救恤開にする。水がきたらだめになるけれど、困っている人はそこを耕して収穫を得てもいい

ですよ、そこには税金をかけませんよ、という形で、一種の社会事業的なことをやっていました。

基本的に、川やその流れは動くもので、固定しているものではない。だから川のそばには住むべきじゃない。その代わり、御救恤開のような利用法もある。こうした思想は、今後も活かすべきだと思います。

使いすぎればなくなる

よく学生に言うんですけど、風呂桶に水を溜めて栓を抜けば水は抜けますが、出る量と入る量が同じならば水位は変わりません。少しでも出る量が多ければ、水位は下がって、いずれ空になる。

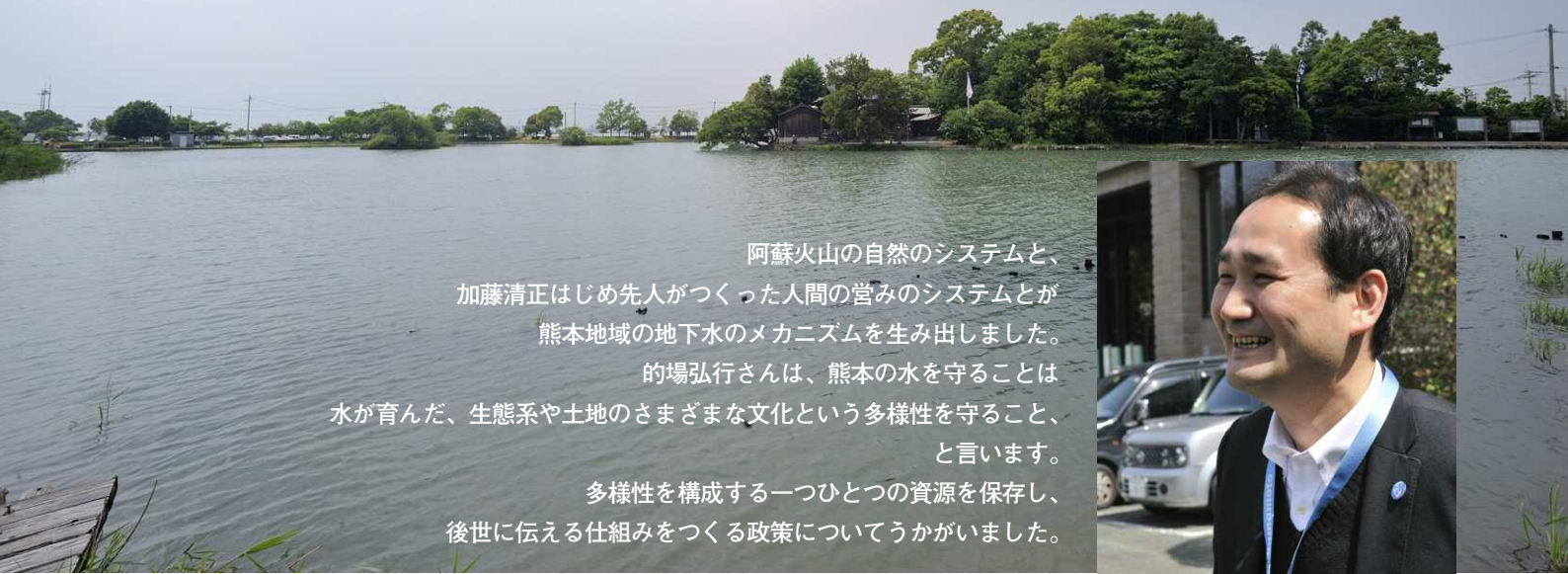
豊かだといわれている熊本の地下水も、使用量が涵養を上回っていたら、いずれなくなってしまう。そのために、どうするか。基本的には涵養を増やすことと、使用量を抑えることだと思います。

水が豊かな熊本だからこそできることはいろいろあります。水のオピニオンリーダーになることもできるはずですよ。

そのためには、せっかくの財産である豊かな水をアピールするとともに、地元の意識も高めていきたいですね。



地下水益と共存する政策へ



阿蘇火山の自然のシステムと、
加藤清正はじめ先人がつくった人間の営みのシステムとが
熊本地域の地下水のメカニズムを生み出しました。
的場弘行さんは、熊本の水を守ることは
水が育んだ、生態系や土地のさまざまな文化という多様性を守ること、
と言います。
多様性を構成する一つひとつの資源を保存し、
後世に伝える仕組みをつくる政策についてうかがいました。



的場 弘行

まとは ひろゆき

熊本市企画財政局 財務部 管財課

熊本市環境保全局水保全課に7年間の在籍ののち、現在は企画財政局管財課に所属。熊本市の地下水保全政策の企画立案から実施を担当。水文化の普及にも注力し、水遺産、水検定、水守など、全国的に注目される熊本市独自の政策を牽引した。

くまもとウォーターライフホームページ
<http://www.kumamoto-waterlife.jp/>

熊本市と地下水

熊本市は豊富で良質な地下水資源に恵まれ、「日本一の地下水都市」といわれています。事実、73万市民の上水道をすべて地下水でまかなっています。蛇口をひねればミネラルウォーター、ダムも浄水場もない、こういう都市はほかにはないと思います。しかし裏を返せば、都市の需要を十分に満たす水資源は、地下水しかない。従って、熊本市は地下水と共存する道を歩まざるを得ないのです。

地下水が地表に露出したものを湧水と呼ぶわけですが、熊本市とその周辺には大湧水地帯があり、市内にある水前寺成趣園や江津湖などはその代表格です。白川や緑川といった大河川も、熊本市に集まっています。それゆえに、濃厚な水文化も育ちました。物質としての水だけでなく、生態系はもちろん、食、風習、伝統文化など多様な水文化、これらをすべて含めて水資源ととらえるべきだと思っています。

ダイナミックな地下水流動系

熊本市は、阿蘇山の西側に位置し、地形・地質は、阿蘇火山の影響を強く受けています。阿蘇外輪西麓から有明海に至る1041km²のエリアは熊本地域と呼ばれ、熊本市を含む11市町村で構成されています。ここに広域の地下水盆地（地下水流動系）が存在します。主要な帯水層は、第四紀の阿蘇火山の噴出物などで、火砕流堆積物や溶岩、砂礫層などが中心です。つまり巨大な地下水の容れ物を阿蘇火山がつくってくれたということですね。熊本地域の地下水は阿蘇の恵みなのです。

は大規模なものでしたので、子の忠弘や細川治世に引き継がれ、完成に至ります。
さて、この水田開発が地下水に大きくプラスに作用するんですね。阿蘇火山の噴出物で形成された土地ですから、水田は非常に浸透性が高く、「ザル田」と形容されます。水田に張られた水がどんどん地下に入っていく。通常の水田の5倍以上の浸透能力があります。水田としては出来の悪い水田ですが、重要な地下水涵養域となるのです。

さらに、白川中流域の地下構造は、地下水の貯留タンクのような水文地質になっていて、しかも中間の粘土層が欠如しているため、深層に直接、地下水を補給します。熊本市の水道水源は深層地下水が主ですから、より重要な涵養域といえます。「土木の神様」といわれる清正公といえども、このことは知らなかったと思います。

このように熊本地域の地下水のメカニズムは、阿蘇火山の自然のシステムと、加藤清正はじめ先人がつくった人間の営みのシステムとが絶妙に組み合わせられた仕組みなのです。白川中流域の水田開発は18世紀にほぼ現在の形に整いまして、現在のような熊本地域の地下水システムはこのころに完成した、と聞いていいかと思います。

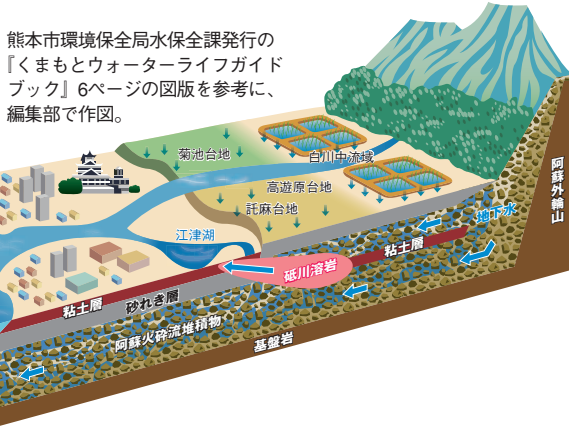


右ページ：「浮島さん」と親しまれる浮島熊野座神社。浮島湧水池の湖面に浮かぶ竜宮城のような神社は、水の郷 嘉島町のシンボルだ。

上：緑川の中無田閘門は、船の航行に際し、加勢川（高い）と緑川（低い）の水位差を調整するもの。水守の井村紘さんが模型を使って仕組みを説明してくれた。閘門の扉はこだわりの木製。

左：的場さん自身も「講座・ガイド水守」。

下：加藤清正手がけた白川中流域の代表的な堰である瀬田下井手の旧取入口（大津町）は屋根付きで珍しい。石柱に堰板をはめる溝が彫り込まれている。



熊本市環境保全局水保全課発行の『くまもとウォーターライフガイドブック』6ページの図版を参考に、編集部で作図。

地下水保全の歴史

広域地下水流動系の発見は、昭和30年代（1955年）の熊本農地事務所（現・九州農政局）の地質官である柴崎達雄さんらによる台地部の地下水開発調査に端を発します。「地下水はどこをどう流れているのか」。阿蘇西麓台地部に広がる畑地に井戸を掘って農業用水とす

と多く、熊本地域においては年間約20億m³の降雨があることになり、このうち約3分の1に当たる約6億m³が地下水に涵養されています。地下水涵養の内訳は、水田46%、畑地・草地41%、山地13%と、水田からの地下水涵養が大きいことが特徴です（1990年度の数値）。

一方、地下水の流出量は約6億m³として、汲み上げが約2億m³、湧水の流出が約3億m³、有明海など他地域への流出が約1億m³となります。これが水収支の概要です。地下水シミュレーションの計算結果によると、近年の水収支は赤字基調にあることが指摘されています。

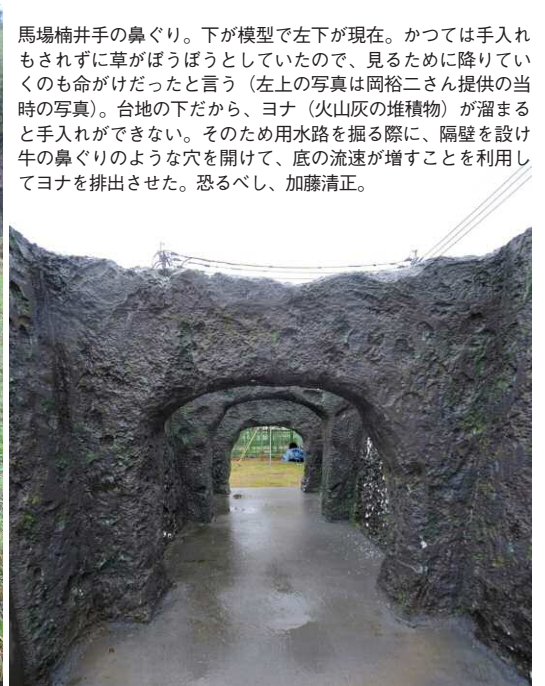
また、地下水の滞留時間は、阿蘇外輪から江津湖まで約20年、同じく白川中流域からは約5年程度と推定されています。

熊本市議会

熊本市議会は翌1976年（昭和51）3月に「地下水保全都市宣言」を決議し、1977年（昭和52）年定へとつながっていきます。建設予定地だった場所は市の公園となり、地下には水源地在整備され、今も主力水源地の一つとなっています。後に「災い転じて福となす」

そのため、水文地質が詳細に調査されました。その後、同所地質官の初倉克幹さんら、大学・在野の研究者や熊本市水道局を中心に研究が進められ、また第四紀地質学の成果も相まって、昭和50年代（1975年）には広域地下水流動系の認識が定着していきます。

特に1975年（昭和50）に起きた健康軍水源隣地のマンション建設問題は、地下水研究を前進させただけでなく、開発から保全へと地域社会の視点を大きく動かす契機となりました。



馬場補井手の鼻ぐり。下が模型で左下が現在。かつては手入れもされずに草がぼうぼうとしていたので、見るために降りていくのも命がけだったと言う（左上の写真は岡裕二さん提供の当時の写真）。台地の下だから、ヨナ（火山灰の堆積物）が溜まると手入れができない。そのため水路を掘る際に、隔壁を設け牛の鼻ぐりのような穴を開けて、底の流速が増すことを利用してヨナを排出させた。恐るべし、加藤清正。

と言われる出来事でした。1980年（昭和53）には、熊本市宮戸島塵芥埋立地の地下水汚染が判明し、大変な問題になりました。平成に入ってから水量保全政策は、1998年（平成10）ごろまでは、県市合同の地下水総合調査の実施、地下水観測井の拡充、大口地下水採取者への節水合理化指導などが中心でした。

この間、水質の面では、トリクロロエチレンなどの揮発性有機化合物による地下水汚染が顕在化し、調査や浄化対策で大変な時期もありました。こうした問題に対して、その都度、反省や対策がとられてきました。

時期が前後しますが、熊本県・熊本市は、多くの研究者の協力を得ながら、1986年（昭和61）と1995年（平成7）に2度の地下水総合調査報告書をまとめる形で、前述の広域地下水流動系の解明、地下水シミュレーションによる地下水収支計算、将来予測などを行ない、合わせて地下水保全の課題解決への道筋が、徐々にではありますが形成されていきます。

このように熊本地域の地下水研究や対策の歴史は、現実的な問題に直面しながら進んできたわけであり、けっして最初から計画的・体系的に進められたものではありません。

地下水政策の発展

熊本地域における地下水量の減少は、時代とともに都市化と水田の減反が進んだことに起因すると考えられます。そのため、長期的には地下水位が低下し、江津湖などの湧水量も減少傾向にあります。一方、地下水の汲み上げ量は、1984年（昭和59）をピークに減少傾向にあります。生活用水使用量は他都市に比べ、依然として高い状況です。

こうした中、地下水量政策を展させる「熊本市地下水量保全プラン」が、2004年（平成16）3月に登場しました。

基本的に地下水量保全の政策は、地下水の汲み上げ量を減らし、地下水の涵養量を増やすしかありません。このプランは5カ年計画として、水収支のバランス改善を念頭に置き、熊本地域の地下水量が抱える課題に対応するよう、体系的に施策・事業が組み立てられています。これらは新規事業が多く、難易度も高いものですが、5年間ではほとんどすべてが実行されました。事業の例を挙げると、節水市民運動の展開、水道料金の改定、白川中流域の水田を活用した人工涵養、上流域との交流連携、地下水保全条例の全面改正などです。



緑川の支流・加勢川の下流に位置する川尻は、岡さんのお膝元。外城蔵と船荷の積み降ろしに使われた約150mの石段が残る。

地域が教えてくれる大切なもの 民の立場で発信する

岡 裕二

おか ゆうじ

筋ワークス株式会社 代表取締役

1955年熊本・川尻出身。本業の地域計画づくりのかたわら、緑川の流域連携組織(NPO法人)や九州の川の流域連携組織(NPO法人)の事務局を務めている。地域づくりの実践例として、NPO法人九州流域連携会議が2000年より毎年主催している九州「川」のワークショップ及び九州川のオープンカレッジ(2003~2008)、2008年熊本県主催：八代元気づくり大賞、2005年から2007年緑川流域委員会委員。



筋ワークス(有)の岡裕二さんに、

熊本のアクアツーリズムスポットを案内していただいた。岡さんは加勢川の下流に位置する、川尻の出身。学生時代以降、熊本を離れた時期があるが、それ以外はずっと地域の変遷を見守ってきた人だ。

本業の地域計画づくりのかたわら、流域のNPO組織、九州の流域連携組織の運営や事務局を務めており、それらの経験と実践とおとしたノウハウや人材・情報のネットワークを活かして、地域づくりアドバイザーやコーディネーターとして、熊本県内外で地域づくりにかかわって

きた。

美しい水が豊富にある熊本でも、水質汚染や地下水位の低下、中山間地の過疎・高齢化や都市部の空洞化といった悩みは、全国共通だ。

「地域が私の先生」を信条に、中山間地域の振興をライフワークにしています。そこから見えるくるのは、活動・実践の範囲が流域環境の保全にとどまらなくなってきた、ということ。地域福祉、環境教育、ひいては防災システムの研究にまで広めていかないと、問題解決にはたどり着きません」と岡さん。

熊本地域には市が積極的に進める水遺産をはじめ、素晴らしい見所が各地に点在する。都会の真ん中の水前寺公園や江津湖のような美しい遊水池は、水の恵みを身近に感じるきっかけだ。

岡さんが案内してくれたフィールドは、水と人の暮らしのかかわりを再認識させてくれる、いわば財産。アクアツーリズムの解釈を広げ、「見る」だけではなく「触れて」「かわる」ことで、環境保全や地域の活性化にも貢献できるのではないかと、実感した。



最も重要な地下水涵養域である白川中流域で注目されているのは、水田を活用した涵養事業です。上流域の天津町や菊陽町などと協定を結び、減反により転作した農地に1~3カ月間水張りを行なって、熊本市が参加農家に助成金を交付する仕組みを創設しました。現在は400戸以上の地元農家の協力を得て、年間約2000万m³の地下水が涵養されていると見込まれています。減反に対応する涵養事業です。

さらに地下水保全条例の全面改正の中で、開発や建築物の新築時などに雨水浸透施設の設置を義務化しています。都市化してしまつた区域の地下水涵養機能を取り戻すことが狙いです。

その結果、降水量の影響もありますが、ここ数年、地下水位が上昇傾向に転じています。東海大学の市川勉教授によると、白川中流域の人工涵養事業が付近の地下水位を約2m上昇させていると、事業の効果を評価しています。しかし、まだ量における対策は不十分であり、2009年(平成21)3月に後継の「熊本市地下水保全プラン」を策定し、事業の継続と定着強化を進めているところです。

一方、水質の面では、硝酸性窒素の問題が深刻化しつつあり、これは待ったなしの状況にあります。

熊本地域の地下水保全は、最終的には広域管理の仕組みづくりが必要であり、今後の熊本の地下水保全の歴史の中で、大変重要なステップとなるはず。関係行政には、これをリードしていく大きな責任があると思っています。

多様性の証明「熊本水遺産」

「熊本の水とはいったい何なのか」と、よく自問してきました。答えは平凡かもしれませんが「多様性」だと思っています。水は、生態系を育み、土地のさまざまな文化を守るといえることは、その多様性を守るといえることです。具体的には、多様性を構成する一つひとつの水資源、例えば湧水であり、水とかわりの深い史跡であり、食であり、祭りや風習であり、これら資源を保存し後世に伝えていくことでしょう。

特に現代は時代の移り変わりが速くて、街並みなどもすぐ変わってしまいますね。小さな湧水地などは開発の波で跡形もなく消え失せてしまいます。こうした現状は、多様性の危機だと思っています。

熊本市では、多様な水文化を守り伝えるため「熊本水遺産登録制度」を創設しました。湧水、食、土木建築、祭り、風習など有形無



形を問わず、熊本市の水文化を構成している水資源を「水遺産」として、市が登録しています。候補は市民から募集し、事務局（水保全課）が調査を行ない、熊本水遺産委員会の審議を経て、登録されます。

手前味噌になりますが、各地の水産を対象にした名水の選定制度と比べると、多様な水文化を対象

にした熊本市の制度のほうが、より本質的であると自負しています。登録数も限定していません。現在、60件の水遺産が登録されています（233ページを参照）。

熊本水遺産は、熊本市の水文化カタログであり、多様性の証明でもあります。水文化というと小難しいですが、いわば郷土の再発見となく、知っていただくことが第一歩なのです。

それで「熊本水遺産めぐり」マップをつくり、水遺産60件を写真付きで紹介しています。なかなか好評で、全国紙の新聞で紹介されたときは、熊本出身の方からたくさんのお問い合わせをいただきました。市では市民講座やツアーも開催しています。市民の方から「今まで知らなかった!」「どこにあるの?」という声をいただく、うれしいですね。

水遺産の登録があった地元では、例えば埃を被っていたような小さな湧水地でも、水遺産登録を機に見直され、清掃や整備が行なわれるところも出てきました。この制度に一番期待していた効用は、このような地域の動きなのです。元来それぞれが歴史を持った素晴らしい資源であり、磨けば光るので

すから。
この水遺産制度は、熊本市が2006年（平成18）11月に策定した

「くまもと水ブランド創造プラン」事業の一つです。このプランは、「熊本を訪れたい」と評価されるような、新たな都市ブランドを水で確立していこうというものです。

プランの中では「保全と活用」の好循環」と説明していますが、魅力や価値に気づいてもらうことが大切なのです。知って価値があると感じれば、自ずと守ろうと心が動く。だから観光的な情報発信も大事です。そういう意味で水遺産は地味ですが重要な事業だと考えています。打ち上げ花火ではない、長期的視点を備えた「急がば回れ」型の事業の一つです。

水と人を ネットワークする「水守」

水守制度とは、熊本の水を愛して活動する人々を「水守」の愛称で登録する制度です。手続きは、申し込み後に講習会を受講するだけです。

大学教授の「研究水守」、飲食店オーナーの「おいしか水守」、タクシー乗務員の「ガイド水守」などなど。実は私も「講座・ガイド水守」なんです。水守の前の部分の名称は自分で自由につけることができます。その名の自覚のもと、自身の持ち場で活動するの



嘉島町湧水公園 天然プール使用規則

事業により作られたプールです。環境整備事項を守って下地使用する際には、次の事項を守ります。

「このプールの遊泳時間は午前10時から、午後6時までです。」

「入水前には体温が十分に下がって下で泳ぐ場合は、泳がれる未成年者は、保護者もしくは引率者同伴として引率者引率者の責任において泳ぎます。」

「このプールは湧水のため雨量により増水することがあります。プールサイドより増水した場合は危険ですので泳がないでください。」

「この湧水池は生活用水として使用されており、プールサイドには下足履物とします。」

「一次の様な症状の方は泳がないで下さい。耳痛、目痛、鼻の悪臭、心臓病、下痢、頭痛、腰痛、発熱、けいれん、ケガ、病後の方、カラス、石などを投げ入れないで下さい。」

「泳いでいる人にたずねたり、おぼれたまねはしないで下さい。」

管理者 嘉島町



熊本県上益城郡嘉島町で生まれ育った宮地小百合さんは、熊本大学文学部総合人間学科で学び、卒業論文に「嘉島町の水環境と人のかかわり」をテーマに選んだ。右ページ上、右下：「かき原」湧水。右ページ左下：「寺の下」と呼ばれる洗い場。宮地さんの聞き取り調査によると、50年以上にわたってここを利用してきた道の向かいにある岩野商店の岩野要子さん（78歳）は、「少し離れた人は、わざわざ洗濯ものを持ってくることが大変だからやめていった」と言う。上の2枚：湧水天然プール。地元村民、川野益雄さんが1927年（昭和2）の明治神宮大会において、水泳競技800m自由形で優勝した記念につくられた。周辺にプール施設がなかったこともあって、水泳選手の練習場所としても重宝されたが、近年、利用者のマナーが悪く存続が危ぶまれている。木道の左の水面に茂るのは、ウォーターレタス。繁殖力が旺盛な外来種で、駆除に頭を痛めている。左：ホテルの蛇口にも「安心して飲める井戸水使用」の文字が。



が水守活動のモットー。水守になると、水守名簿が配布されます。事務局から「水守ニュース」が配信され、各水守さんの活動情報が届きます。現在132名の水守さんが各地で活動しています。「水守ニュース」もメルマガ会員に登録すれば受信できます。制度設計としては、人材情報バンク、活動情報バンク、ネットワーク形成の3機能を備えた仕組みになっています。

水守になるには資格など不要で、熊本市外の方も登録することができますので、登録してみませんか？ ただ一つ求められるのは、マイペースの活動だけです。

合格者1万人突破！ くまもと「水」検定

2008年度（平成20）からは、水検定を行なっています。全国初の「水のご当地検定」としても話題になりましたが、送料負担だけの無料検定としても関係者には知られているようです。目指しているのは、知ってもらうこと。もう少し欲をいえば、水を横断的に知ってもらおうことです。繰り返しになりますが、多様性です。

公式テキストブックを読んでもらえば、横断的という意味が理解できると思います。阿蘇があり、

清正があり、地名があり、歳時記があり、わりと本格的な熊本地域の地下水の説明があり、いろいろな角度から水を見せています（49ページを参照）。

市民の皆さんが自腹でテキストブックを買って、水のことを勉強してくれる。有り難いことです。従来の行政の押し売りともいえる啓発講習会とは180度違います。

水検定には1級〜3級があり、3級は入門レベルといえども、熊本の水の全体像が理解できるような設問形式になっています。3択30問で、問題を市の広報紙などに公開しています。つまり、何を見て解答してもいい。通信試験なので解答を郵便で送るだけで受験完了です。70点以上が合格ですが、取り組んでもらうだけで十分価値があると思っています。

去年は海外からも3級の受験者があったんですよ。合格すると何かもらえるのか？ いえ、認定証と自己満足だけです。

水検定受験者には小中学生が多いんです。実は、市内の小中学生は、卒業するまでに全員に合格してほしいと願っています。小学校に出張授業に出かけて水検定を受けるよう促す活動もしています。最終的には「教育」なんですよね。





高齢化と後継者不足から、存続の危機が取り沙汰される農村。阿蘇でも、草原保全に不可欠な野焼き作業が続けられない地区があります。「景観資源」として保全したい観光産業の思惑と農家が生業として牛を飼うことで、結果として草原保全を行なってきた事実。とかく対立の構図で語られる農村と都会、地元の暮らしと観光産業ですが、「それは不毛の議論」、と言う山口力男さんの目指す先をうかがいました。

くまもとアクアツーリズム

訪れる人と共有する生業の場



山口 力男

やまぐち りきお

阿蘇百姓村村長

1947年熊本県阿蘇の赤水に生まれる。同志社大学法学部へ進むが中退。世界各国を放浪。1973年に帰郷、30歳前に農業を決意。1993年「阿蘇百姓村」開村。農業の振興と、都市生活者との交流の拠点にする。1987年全国農協青年組織協議会委員長、熊本県阿蘇町農協理事となる。阿蘇山麓の農業経営者らと農作物の宅配、農作業請負などのグループを結成し、農村と都市との交流に努める。

周年放牧の試み

繁殖農家が子牛を産ませて、肥育農家が子牛を買い取って太らせて出荷し、食肉業者が解体して商品にすることで、牛肉は皆さんの食卓に上がります。

私は米をつくったり牛をつくったりしている。この地域の畜産家は、私も含めてほとんどが繁殖農家です。

阿蘇の繁殖農家は、普通、夏山冬里方式といって、夏は山に放牧して、冬になる前、11月ぐらいに家に連れて帰って牛舎で飼う。

しかし私はズボラから出ている動機で、一年中、山に置いておいたらまずいんだろうか、牛は嫌がるんだろうか、と考えた。もしそれができたら、コストも下がる、と始めてみたんですよ。だから、今は周年放牧といって、一年中、山に置いておく。子牛も山で産ませて、離乳期が済む3カ月齢ぐらいのときに、家に連れてくるんです。それで10カ月齢になるまで育てて市場に持っていきます。

近隣の何軒かの農家もやるようになりましたが、家で飼っているよりも、いなくなったり死んでしまったりというリスクはあります。牛は生きものですから、食べものと水が不可欠。冬場に山の水が

確保できることが、周年放牧の条件になります。冬山の草は枯れてしましますから、サイレージを定期的に山に持っていつていきます。

サイレージ(silage) サイロ(収蔵倉庫)に牧草などを詰め、発酵させ、密閉することでカビや腐敗を防いで、長期保存を可能にした家畜用飼料の一種。水分量の調整や乳酸菌などを添加するなど、農家によって工夫が凝らされる。

行方不明はこの10年で2頭。周年放牧が原因と考えられる死亡は、ここ20年で8、9頭です。

牛の場合は役目を終えたら屠殺されますが、うちでは引退させて死ぬまで飼う。20年という人間でいえば80〜90歳です。

周年放牧で一番肝要なのは、種付けです。種付けしないと、子牛は産まれませんが。本来、牛の種付けは99%人工授精。人工授精の免許を持った人が、優れた遺伝子を持った雄牛の精子を人工授精させ、より高く売れる牛を交配でつくっていきます。

毎年、県で、種牛の候補となる雄を選抜していくんですが、だんだん絞られてきた段階で落選する雄が何頭か出ます。その雄は屠殺されるわけですが、それもなんですから貸してもらえませんか、とお願ひして連れてきます。ですから、周年放牧プラス自然交配。だから、雌牛は私に感謝状をくれる。



畜産農家の都合でいえば、1年1産してくれたら、その牛はパーフェクト。30年、40年の経験を持っている名人でも、13カ月か14カ月1産が限界です。12カ月で子供を産んだら、可能な限り早く乳離れをさせて子宮を回復させて、受胎可能な状態に雌牛の状態を整えて、人工授精して次の子供をつくる。ものすごく条件を整えてやっても、1年1産は難しい。

牛というのは、人間と違って、月に1回しか発情がこないのですよ。それもたった3日間ぐらい。これを逃したら雌は受胎しません。だから繁殖農家にとって、雌の発情がきているかどうかを計るのは、非常に重大な問題なのです。

しかし雄牛ならわかるから、1年1産ができるんじゃないかな、と考えました。データを取っていませんが、それでも1年1産は難しい。やはり雌牛の体調もあるんでしょね。それで平均すると、13カ月1産ぐらいになるんですよ。

借りてきたとはいっても、県は返せとは言いませんから、うちの雄ももう6年ここにいます。

ハーレムですがお相手が22頭もいるもんですから、最近ちょっと疲れ気味なんです。来たばかりのころは、精悍な顔つきの自信満々の様子でしたが、最近ちょっと

でも義務を果たさないと、屠場

に連れて行かれると必死です。だから、「大丈夫。役目が果たせんでも、ここで死ぬまで飼ってやるから」と言い聞かせているんです。なのに、柵を越えて隣のかわいい牛の所に行ったりしている。柵なんてね、雄牛にとってはあつてないようなものです。ジャンプするもんね。助走なしでぱっと飛ぶ。牛は生きもの。好みもあって、意思もある。だから牛とつき合うのはなかなか大変です。

水場を整える知恵

今はポンプで汲み上げていますが、じいちゃんの代には技術的にも財政的にも山に飲み水を確保することが無理だった。

そのころはどうしていたかというと、草千里の放牧地にある窪地に水が溜まるじゃないですか。そこを牛たちは自分たちの糞尿を踏み固めてピロッド状にして、水が地下に浸透していかないようにして、飲み水を確保していたんです。

だから牛たちは、この窪地には雨が降ったら水が溜まるということを知っていて、地下浸透したら水が減ることもわかっています。そういうことをしたということですから、牛も馬鹿にしたらいかんです。生命体は生きる力を持っていてということ。草千



里には、今でもそうした水飲み場が残っています。先輩からの又聞きですけれど。

広大な敷地を利用する

昔は大半が牛飼いだっただのに、今は集落370戸中、畜産農家は5戸だけ。

ということとは、あの草原はもう維持できない。私たちは、熊本の人たちの水源としてあの草原を守っているわけじゃなくて、阿蘇の暮らして畜産が、結果として水源を守ってきたということです。

ストレートな言い方をすれば、採算に合う価格でなくなれば廃業するしかありませんから。370戸中、5戸といたら、統計学上は誤差の範囲ですからね。もう畜産農家はない、と言ってもいいぐらいの数です。

しかし、うちの集落が管理している草原が260ha（東京ドーム55・6個分）といえますから、かなり広い。これだけの面積があると、畜産でないと維持できないでしょう。全部をゴルフ場にするわけにもいかないぐらい広い。散策コースにしても広すぎますよね。

所有権と利用権

所有者は個人だったり百何十名



藤村 美穂

ふじむら みほ
佐賀大学農学部准教授

1965年生まれ。関西学院大学社会学研究科博士後期課程単位取得退学。社会学博士。

主な著書に『環境民俗学—新しいフィールド学へ』（共著／昭和堂 2008）、『東アジアモンスーン域の湖沼と流域—水源環境保全のために』（共著／名古屋大学出版会 2006）、『景観形成と地域コミュニティ—地域資本を増やす景観政策』（共著／農文協 2009）ほか



景観資源は誰のものか

産業の変遷と景観保全

阿蘇をフィールドとして、生活環境主義の視点から景観を見つめた藤村美穂さん。

「使いながら守る」ことが難しくなった草原をいかに維持・保全していくのか。

解決への第一歩は、

「人間の営み」を大切にすることにあるのかもしれませんが。



の集団であったり市役所だったりするのですが、利活用は主に入会権です。

入会権の前書きには、草原利用は「採草放牧」と明記されています。つまり牛にまつわる場所だと規定されているんですね。ただ、もう採草も放牧もしない人が圧倒的に多い中では、その入会権はどう考えたらいいか、ということが問題になってきています。

例えば畜産農家としての採草放牧はやめたけれど、その集落の利益を得るためにゴルフ場に貸した場合は、入会権が認められているのです。拡大解釈ですね。

こういうときには、金が発生するから取り決めが厳しいんです。例えば、ゴルフ場が100万円払った場合、所有者の市は5万円、入会権者の集落が95万円を取ります。この先、こういうことはどんどん増えていくでしょうね。

入会権がどういうものであれ、権利を主張するからには、それなりの義務がある。草原を維持・管理しなくてはなりません。その象徴的な行事が野焼きです。

これらのことを平安時代から行なっていたらしいのです。しかし今、継統が危ぶまれています。

集落によってはボランティアを入れてるところも増えていきます。ボランティア自体を否定するつも

阿蘇の草原と赤牛の意味

環境省が2001年(平成13)に行なったアンケートでは、観光客は阿蘇の魅力について「草原が広がる風景」77%、「山の連なりやカールデラの風景」50%、「牛馬のいる風景」38%と答えています。

火山の噴火によって形成されたこの草原は、年平均気温10℃、降水量3000mmを超えるという気象条件から考えると、度重なる火山灰の影響があったとはいえ、現在ではうっそうとした森林に覆われていてもおかしくありません。

それにもかかわらず、10世紀ごろから今日に至るまで、約1000年もの間、広大な面積の草原が維持されてきたのは、人間の絶え間ない働きかけが続けられてきた結果です。

ここは、火山灰で覆われた酸性土壌であったために、水田の肥料として大量の草や家畜の糞が不可欠でした。多くの地域で勃発した水争いですが、阿蘇では草が、それに匹敵するぐらい重要な価値を持っていました。いくつかの村が入り合って利用してきた阿蘇の草原は、草が不足した時期には、利用権を巡って度重なる領土争いが起こったことが記録されています。阿蘇の草原景観に大きく関与してきたのは、赤牛です。

褐毛種 あかげわしゅ

一般に赤牛といわれる。熊本系と高知系に分けられ、いずれも起源は韓牛といわれている。現在の「くまもとあか牛」は阿蘇、矢部及び、球磨地方で飼われていた在来種とシメンタール種の交配により改良された固有種で、1944年(昭和19)に和牛として登録された。肥育において、黒毛和牛は約5tの飼料が必要なのに対し、赤牛は約4tと、成長効率の良い品種である。

赤牛は、耐寒・耐暑性に優れているため放牧に適し、性格がおとなしいので群れで飼いやすい。また、ダニに強いという特性のために、長らく阿蘇で飼い続けられてきた品種です。

戦後、農業機器の機械化や化学肥料の導入で、耕作用の赤牛は役能力としての役目を終え、畜産用に飼われるようになりました。1950年代半ば(昭和30年代はじめ)からは、広大な草地を持つ阿蘇は、国政や県政からも畜産基地として注目されるようになりました。

1970年代(昭和45)になると、農家はサラリーマンに転職して兼業化が増える一方、規模を拡大する畜産業者も出て、牛の頭数が増えて農家の数が減少するという傾向になりました。

ところが1991年(平成3)4月に輸入枠が撤廃され牛肉の輸入が自由化されたからは、国内の畜産頭数は激減しました。阿蘇も例外ではなく、既に畜産農家がいなくなった地区もあります。





国土地理院基盤地図情報(縮尺レベル25000)「熊本」および国土交通省国土数値情報「河川データ(平成20年)、鉄道データ(平成20年)」より編集部で作図

りはありませんが、大分県湯布院町での野焼きによる死亡事故のよ
うに不慮の事故が起きたときに、
ボランティアに対してどういう責
任を取るんだらう、と思います。

うちの集落でも2年ぐらい受け
入れたのですが、ボランティアの
人たちは張り切っているでしょ。
それで本来先頭にいかなくてはな
らない入会権者のほうが下がっ
ちゃって、観客席におるんですよ。
それはおかしい。権利を主張す
るなら義務もちゃんと果たすべ
きじゃないか、といって、ボラン
ティア受け入れを断ったんです。

しかし、入会権者だけで野焼き
を実行するのが危うくなっている
集落もあります。そういう所に
(財)阿蘇グリーンストックとい
う団体が入ってやっています。

景観は資源か

ここで生まれ育って、ずっとお
る人間にとっては、極めて当たり
前の景観であって、景観が資源だ
と言われてもピンときませんね。

私も一度出て行った人間ですが、
日常の暮らしの中で、ここを資源
ととらえたことはない。自分たち
の暮らしの場ですから。牛を飼う
ために必要だったから、強い関心
を払ってきただけであって、資源
という気持ちはありません。

景観維持のための野焼き

阿蘇で有名な野焼きは、草原の
維持に重要な行事です。

野焼きをするのは、春になって
地面に発生するダニ類を撲滅する
のが第一の目的です。このダニ類
は牛の大敵で、昔から壊滅を目指
しているのですが、まだ果たして
いません。

もう一つは、冬場に枯れ野にな
るために、防災上、極めて危険な
状態にある草原に意図的、計画的
に火を入れて、焼き払うことで枯
れ野を整備します。放牧地と人の
暮らしの場の境界には森がありま
すが、そこも燃えたらすぐに人家
ですから、とても危ないのです。

ダニ駆除、防災のほかに、草の
芽吹きをいつせいにそろえる、と
いう役割もあります。枯れ草の層
が厚い所では、なかなか新しい草
が芽吹かないからです。観光の面
からは、「いつせいに芽吹いた美し
い新緑」として、訪れた人たちに
大変喜ばれます。

しかし、畜産農家が減少し、高
齢化する中で、労力も技術も要求
される野焼きは、徐々にこなわれ
なくなってきました。現実的に続
けていくことが困難になってきた
のです。

そのため、利用や手入れができ
ずに放置され、灌木林になりつつ
ある所、植林された所などが増え、
阿蘇全体の草原面積は明治期の3
分の1になってしまったといわれ
ています。

手入れができずに放置された森

林の問題は、阿蘇に限らず全国に
及んでいます。一般的には、最低
限の手入れをして密植した林地に
空き地をつくって光を入れ、自然
の植生に戻していく整備をする、
という対応策が考えられますが、

阿蘇に住む人にとつての「生活の
場」は、訪れる人にとつて「景観
資源」と見なされるので、放置し
て自然林に戻すわけにはいかない、
という事情があります。

それで国立公園の管理を担当す
る環境省は、1996年(平成8)
から景観を守るための積極的な保
全策を打ち出していくようになり
ます。

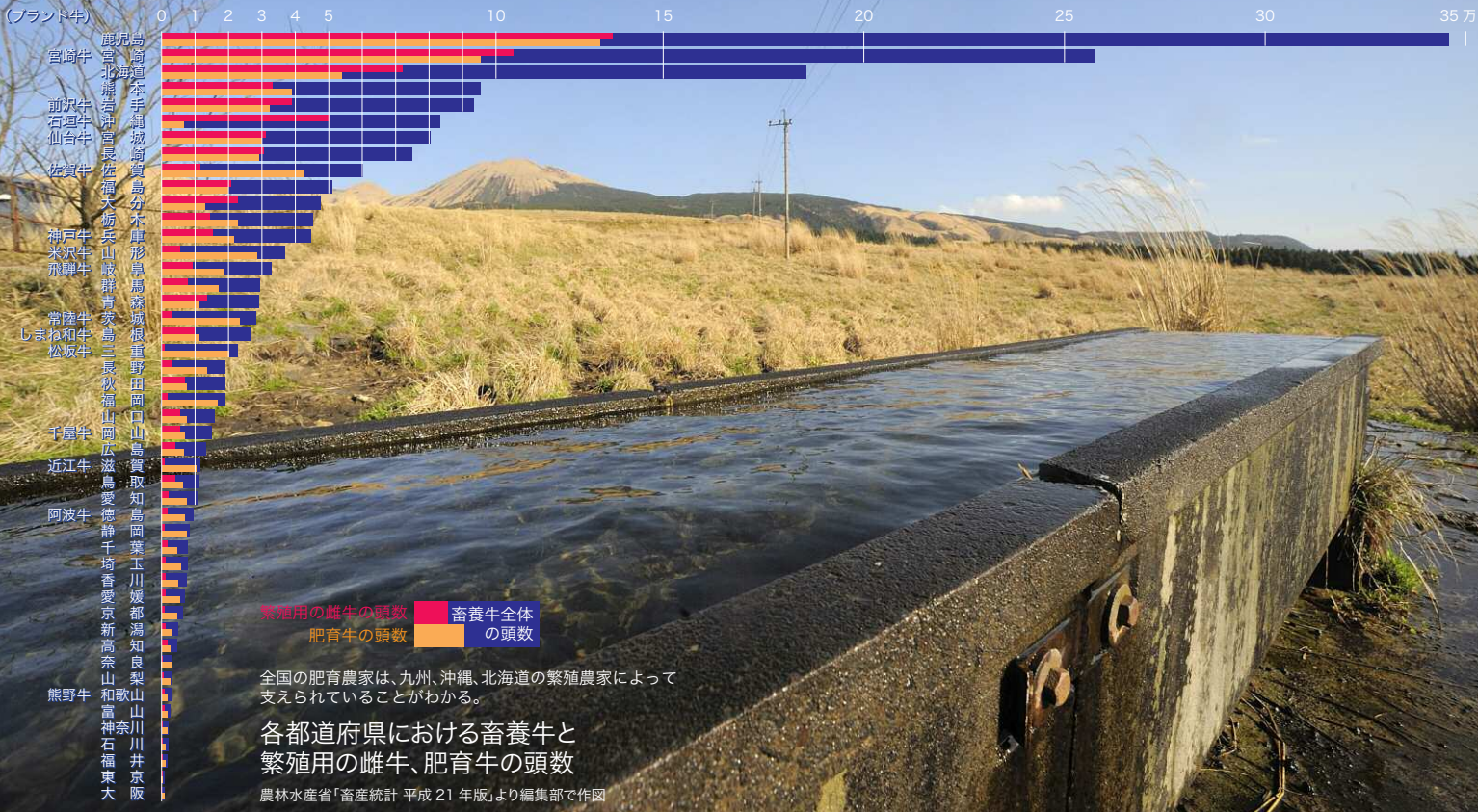
その中には、これまで草原景観
を維持してきた農業・畜産業と両
立させるための試み、例えば輪地
切り(延焼を防ぐための防火帯づくり)
労力削減のための設備、技術の開
発実験や、赤牛産直活動の支援、
草原再生を活用した観光・環境教
育などがあります。

景観資源の保全のために、環境
省がこまめやるといふことは、
普通に考えると不思議な気がしま
す。

しかし、阿蘇の草原が地域資源
として利用・管理されてきた結果
としてつくり出され、維持されて
きた経緯を考えると、保全すべき
景観の中には放牧や採草、野焼き
といった「人間の営み」が含まれ
るのは必然的なことである、とい
えます。

誰が守っていくのか

民間レベルでは、牛肉輸入自由



ただ、財産という意識は、どこかに持っている。だから、関心は薄れるけれど、完全に無関心になることはないのです。だから、都会の人とか、他人が自由にしようとする気にはなりません。

他所からの人が別荘を建てることなんかは、冷やかに見ていますね。自分が生産年齢としてピークにいるときには都会にいて、そこで税金を納めておいて、引退したらこっちに暮らす、というようなことには、感情論としてですが、違和感を覚えると思います。

これは実際の話ではありませんが、例えば集落でつくって維持している水道を別荘の人に分けるかどうか。自分で買った土地だからといって、ほとんど挨拶もなしに家を建てて住むような場合に、水をやらないケースも出るかもしれません。そうなる、その人は「田舎の人というのはなんて閉鎖的だろう」と思うでしょうが、そこに至るプロセスが問題になりますものね。

でも、これだと永遠に平行線の村の封建制とか閉鎖性とかいいますけどね、所詮、人です。お互いが向かい合おうという気持ちがあるかどうかです。

今の都会の人たちは、生きるためのインフラがすべて整備されている所で暮らしている。しかし、

化の翌年、1992年(平成4)に地元新聞社が「草原の危機」と題して連載した記事がきっかけとなって、大手観光業者や熊本市内の生活協同組合などが行動を起こしました。

くじゅう高原の大手リゾートホテルが1993年(平成5)に「くじゅう環境保全基金」を設置したのを皮切りに、1995年(平成7)には「全国草原サミット」が、1998年(平成10)には「野焼きボランティア体験・検討会」(観光協会などが主催)が開催されています。

一方、環境収奪型の観光に危機感を抱いていた研究者や熊本市内の生活協同組合などが中心になって、(財)阿蘇グリーンストックが1994年(平成6)に設立されました。この財団の事業は、草原の緊急避難的保全対策と並んで、「新しいかたちでの人と草原の共生」を掲げており、都市住民の思いを受け止めるチャンネルにもなっています。

負ける勇気を共有する

(財)阿蘇グリーンストックでは1998年(平成10)から野焼きボランティアの組織化を進めており、2005年(平成17)には延べ600人近い応募者が集まるまでになりました。野焼きボランティアの働きかけによって、中断していた野焼きを再開した地区も増え始めています。

ただ、野焼きは危険を伴う作業ですし、技術や経験が必要とされ

るために「野焼きにはボランティアを入れない」と決めている集落もあります。

草原の利用方法が変わることで、その価値も変わります。農業や畜産業による利用が減ったことで、観光による「景観資源」という新たな価値を与えられた阿蘇の草原は、今後どのように維持・管理されていくのでしょうか。

おそらく、今までのように実際の利用者の考えだけで、草原の維持・管理が進むとは考えられませんが、利用権を持つ人たちの意見を尊重し、直接利用していないが「景観資源」として草原を大切に思う人たちの意見にも耳を傾ける。そういった、歩み寄りが必要なのかもしれません。

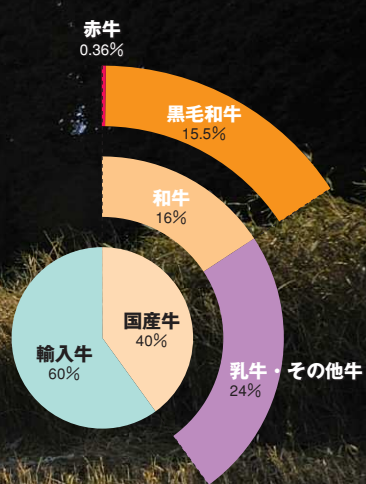
草原を維持してきた農家の人たちは、自分がここで暮らすことの意味を考え抜いて、生活している人たちです。経済成長期やバブル景気といった時代には、その感覚は間尺に合わないと思なされたかもしれませんが。

しかし、阿蘇のある農家の人は、それは「負ける勇気」である、と表現しました。

今後の草原の保全に際しても、単に観光資源として貨幣換算できる価値を求めていたのでは解決になりません。

住民の人が自分たちの将来を考え抜いて決めることは、外部の人たちの思いと、そうかけ離れた選択にはならないような気がします。





褐毛和種 熊本と高知を主産地とし、それぞれに独自の改良の歴史を持っている品種

日本短角種 在来の南部牛にショートホーン種を交配して改良した品種

無角和種 在来の黒毛和種にスコットランド原産のアバディーン・アングスを交配した品種

黒毛和種 中国地方の在来種に、外国種のフラウンスイス、デボンなどを交配して改良した品種

日本国内の消費牛肉の内訳

〔熊本県畜産農業協同組合連合会〕HPをもとに編集部で作図（数値は2002年）

農村にはそれらが不備な所が多い。だから、入会的に物事を決めていかなくちやならない場面がたくさん残っているんです。

田舎ではそれができないと暮らしていけません。だから、田舎に住もうと決めたときには、そのことを覚悟しないと。

集落370戸のうち、入会に關しても無関心な家が増えてきて、今現在、参加者は150戸です。

採草地は分けて、不公平感がないように毎年場所を変えながら利用します。草原に印があるわけではないんですが、みんな、もうわかっていますから。

ただ、今はもう5戸しかないもんですから。私が農業を始めたばかりのころは、まだ40戸ぐらいはあった。だから、今は1人で10倍ぐらいの土地を利活用しているという事です。それでも、5戸で分けているんですよ。

万が一、これから新規に畜産に参入したいという人が現れたら、当然のことながら土地は増えないわけですから、1戸あたりの土地は狭くなります。でもまあ、そうになったら、みんな喜んで狭くしますよ。

幸い、私は経験しなくて済みましたが、昔は採草も大きな鎌で切りました。ものすごい重労働です。作業によってはかなりハードです。

危険もあります。平坦地で何の障害物もなかったら、トラクターも安全なんです。でも傾斜があったり、谷があつたり。しかも今は人手がありませんから、トラクターを使わないとやりきれません。

自慢じゃないですけど、4年前に私はトラクターの下敷きになったんです。骨がバラバラになって、今でも身体に鉄板が入っています。そういうリスクもありますから。直後は身体が怖がつて、アクセルを踏めないんですよ。やっぱり、思い出すと怖いですよ。

そんな目に遭つてまで、なんで私は畜産を続けるのか。「お前はまだ死んではいかん。生きて社会貢献しろ」と神の啓示があつたんです。それでなければ、今ごろ死んでいる。

金で解決することではない

環境税とか水源税とかいわれていきます。資金はもちろん大切ですが、そういう税金を集めれば畜産農家が増えたり、地域が活性化するかという点、私は必ずしもそうではないと思つています。

それよりも社会の雰囲気とか、意識や価値観が変わらないとだめですよ。

今の社会は、ますます都市に極集中したり、価値観が限られて

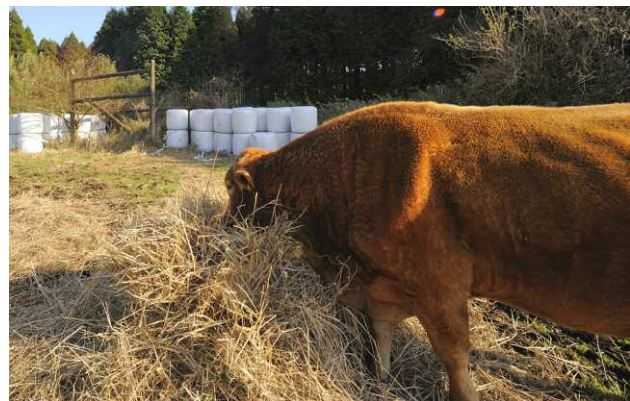
きたりしています。そうじゃなくて、価値観がもっと多様化し、いろいろなことを受容する社会になっていかないと、いくら金があつても解決しない。

長い間、比較論がいわれてきて、都市と農村ではどっちが良いというふうな発想しかなかった。そういうつまらない議論はそろそろやめたほうがいい。

誰に権利があるとかないとか、そういうことではなくて、普通に生きていく人たちの価値観の中に「都市だろうが農村だろうが同じように大事」という気持ち芽生えて、もしそこが損なわれようとしていたらそれを「サポートするのは当たり前だ」と思う社会にしていかなければ、そういう意識が一般化されないと、もう田舎は、農業は、畜産は守れないと思います。

田舎に居ることが、さも負目や引け目に感じられるような社会が異常なのであって、もっと正常な社会をつくらなくと。

比較優位論は、金や効率でしか、ものを見ないんですよ。価格だけ比べて高いから買わない、という素朴な行為が日本の畜産をどんどん追いつめています。ちょっと高ければ日本の生産者がこれだけ頑張っているんだからと、ごく普通に選択する人が、ごく普通にいるような社会になれば、ずいぶん



多くのことが解決するように思います。もちろん、それは生産者側の勝手な願いかもしれませんが。

牛肉偽装事件のことをいえば、今の流通の問題点もある。一生懸命つくる人、一生懸命売る人が、それぞれ2割ずつぐらいの利幅しかもらえず、その中間にいる流通業者が6割の利幅を持っていってしまう。これをそのまま放置しておいていいのか、という議論も当然出てくるでしょう。

これも含めて、もう少し日本人の人間としてのレベルアップが必要でしょう。品格というのは、そういうものだと思うんですが。

だって、都会から来る人たちが喜んでくれることを、田舎に住む人たちが胸を張って共有できるような環境になつてないじゃないで

すか。比較論ばかり言つて。

都会から来る人間はフリーライダーだ、というばかりでは、不毛の議論。人の喜びが自分の喜びになるような世の中にならないと、そういう関係を早くつくらないと、田舎は守れない。

「たまたま違う場所に住んでいるけれど、目指すところは同じ」と思いを共有できるような社会になつたら、農村は守れる。そうでない、いくらふんだんに農業補助金をここに入れても、田舎は守れない、と私は思います。

この場所を大切にしたい

こう言いながら、どうしても立場にこだわっているなあ、と自分でも反省します。よく考えたら、今は農村の人のライフスタイルや価値観も都会と変わらない。だから、本当に議論しなくちゃいけないことは何なのか、ということに気づくことですね。

そういう世の中をつくるためには、もっと立場が違う人たちが話し合う場をつくらないといけない。うちの集落でも入会権者は150戸と言いましたが、自分の意志

で出た人はともかく、入れない人は「なぜ、うちには入会権がないのか」ということが今、議論されています。集落によって与え方が

違うんですが、うちの集落では長男だけが継承してきたという経緯があるから、次男以下や分家が発言し始めた。昔からの家でも持つていない場合があるんですよ。

個人の考えとしては、この議論をプラスに持っていきたい。入会権者がどんどん減っている今だからこそ、新しい人を入れたらいい。ただ、そのために一定の条件をつけなくてはならないから合意形成が必要。

入会権というのは慣習法のようなものだから、その時々で決めていけばいいんです。

ただ、みんな権利には敏感だけれど、それには義務がついてくるからね。その両方を果たすというのは、至極当然のことです。

資源と考えて野焼きに来るのか、財産と考えて野焼きに来るのか、そんなことを問題にすることはない。この場所を大事にしたい、という気持ちがあればいいんです。

住む人と訪れる人が、どのように阿蘇を共有するか。どちらも阿蘇が好きなら、好きということが両者の共通項ですから。そこには差異はありません。

立場の違いを、対立関係でとらえることはないんですよ。



ブラックツーリズムのススメ

熊本県水俣市久木野ふるさとセンター愛林館の提言



新しいツーリズム・地域活性化策として有望視される「アクアツーリズム」。

実際にアクアツーリズムと謳っている例はまだないが、これに先行するグリーンツーリズムは、農林水産省や環境省にも推奨され、各地で行なわれている。

教育旅行に代表される受注型企画旅行で、ある程度の収益を上げないと成立しないといわれるグリーンツーリズムだが、観光産業の側面からではなく、「公益的機能に金を払う」という世論形成活動として位置づけるとしたら、話は別だ。

実際に、世論形成のためにグリーンツーリズムを実践し、観光の光の部分だけでなく影も見せる「ブラックツーリズム」を提唱している、熊本県の水俣市久木野ふるさとセンター愛林館（以下、愛林館）の活動を紹介しよう。

まずは、編集部のグリーンツーリズム体験から。

おもてなし

昼近く、愛林館に到着。この日は月に2回の食堂営業日。地元的女性たちが、地場の野菜や米を使っておいしい定食をつくっている。タイカレーなどのエスニック料理

の日もあるが、この日は棚田でとれた餅米とあずきで炊いた赤飯、九州産の小麦粉でつくった団子汁に地域で採れた柚子でつくった柚子胡椒といった、100%国産どころか100%地場産の和定食だった。

館長は、愛林館ができたときに公募で選ばれた沢畑亨さん。

「この割り箸も熊本産の間伐材でできていますから、どんどん使ってください。杉の良い香りがしますね。白い割り箸は、ポプラや柳シラカバなどが材料で、防カビ材を使っているから要注意ですよ」と、食事にかかわる話にも、環境を学ぶ要素はたくさんある。

赤飯に使ったあずきは、研修生の村田佐代子さんが手塩にかけて育てたもの。

「あずきの花は、バラバラと咲きます。そこで、実もいつせいは完熟せず、収穫時期がバラバラなので、ものすごく手間がかかりました。サヤの中のあずきを取り出す作業もひと苦労。あずきの国内生産が減った理由が、栽培してみてわかりました」

と村田さん。

餅米は万石^{まんごく}という品種の香り米だ。久木野地区の棚田では、昔からうるち米と餅米の2種の香り米がつくられてきた。うるち種の香り米は草丈が2mと高く、長い薬



5月22日行なわれた「棚田のあかり」。約2000本の竹筒に稲わらの芯を入れたたいまつを灯す。

ご先祖に「今でも元気に耕作をしていますよ」とご報告。燃料は、使用済みの天ぷら油を加工したバイオディーゼル燃料。



沢畑 亨さん

さわはた とおる

水俣市久木野ふるさとセンター 愛林館館長

1961年熊本県生まれ。東京大学農学系大学院林学専攻修士課程を修了。農学修士。修士論文「80年代後半のむらおこし運動の考察」

卒業後、西武百貨店に入社。1988年に退社、今井俊博さんと「熱帯文化研究開発機構」を創設し、コンサルテーション・執筆・編集などを行なう。1994年、愛林館の館長に全国公募で選ばれ現在に至る。水俣市環境審議委員、熊本県地域づくりコーディネーター、熊本大学講師など。主な著書に『森と棚田で考えた一水俣 山里のエコロジー』（不知火書房 2005）



上：久木野の棚田を見る一番のビューポイント。沢畑館長の家から日本一近い棚田だ。1枚1枚が狭いこの棚田に耕うん機を出し入れする苦労はいかばかりか。また、水俣市の森林は90%が人工林。用材林とするには不向きな奥山までもが、杉や檜の人工林に変えられていった。沢畑さんは、奥山には適地適木でもっと広葉樹の森を増やそうと、水源の森づくりにも励んでいる。右：豊かな水と人の努力に育まれた収穫物が食卓に上がる。研修生の村田佐代さんが丹誠込めてつくったあずきと棚田の米でつくった赤飯は、大変なご馳走だ。

この湧き水のお蔭で、あれだけの棚田ができるわけです。下に18軒の集落がありますが、飲料水をここから取っています。水洗便所

た水量が豊富にあります。

の所はすぐに涸れます。川は頼りにならないのですが、湧き水は涸れないので、ここから下は安定した水量が豊富にあります。

しかし山が深くないので、ほか

いています。1日あたりの湧水量は、3000tといわれています。

「寒川を抱く、大関山は標高901m。寒川水源は、標高3000mほどの所にあります。ここには、よほどよい具合に水が集まってきているようで、じゃんじゃん湧いてきます。1日あたりの湧水量は、3000tといわれています。」

源でもある。

「寒川を抱く、大関山は標高901m。寒川水源は、標高3000mほどの所にあります。ここには、よほどよい具合に水が集まってきているようで、じゃんじゃん湧いてきます。1日あたりの湧水量は、3000tといわれています。」

源でもある。

「寒川を抱く、大関山は標高901m。寒川水源は、標高3000mほどの所にあります。ここには、よほどよい具合に水が集まってきているようで、じゃんじゃん湧いてきます。1日あたりの湧水量は、3000tといわれています。」

源でもある。

「寒川を抱く、大関山は標高901m。寒川水源は、標高3000mほどの所にあります。ここには、よほどよい具合に水が集まってきているようで、じゃんじゃん湧いてきます。1日あたりの湧水量は、3000tといわれています。」

源でもある。

「寒川を抱く、大関山は標高901m。寒川水源は、標高3000mほどの所にあります。ここには、よほどよい具合に水が集まってきているようで、じゃんじゃん湧いてきます。1日あたりの湧水量は、3000tといわれています。」

源でもある。

「寒川を抱く、大関山は標高901m。寒川水源は、標高3000mほどの所にあります。ここには、よほどよい具合に水が集まってきているようで、じゃんじゃん湧いてきます。1日あたりの湧水量は、3000tといわれています。」

源でもある。

傾斜地のままでは耕作地がつかないから、一部を削ってその土を谷側に落とすことで平らな土地をつくる。棚田は、そこから出てきた石を山側の矩り面に積んで崩

も風呂も、全部この湧き水。贅沢ですよ。ニジマスの養殖もやっています。

今上がつてきた谷間には、両側に約30ha、約600枚の棚田が広がっています。30haの棚田というと、九州では上から3番目ぐらいの規模です。『棚田100選の中で日本一私の家から近い棚田』です。略して、日本一の棚田」

久木野を過ぎて山越えすると、すぐに鹿兒島県だ。

この急な峠越えには、以前、国鉄山野線が走っていた。水俣久木野間は1934年（昭和9）に、久木野薩摩布計間は1937年（昭和12）に開通した。1988年（昭和63）に廃線になるまで、わずか50年ほどの間、地元の貴重な足として利用された。

水俣久木野間の廃線跡は、廃止後早々に撤去工事が進み、水俣駅起点で14kmの日本一の長さを誇る運動場となった。愛林館ではここで毎年、久木野しし鍋マラソン大会を開催している。

傾斜地のままでは耕作地がつかないから、一部を削ってその土を谷側に落とすことで平らな土地をつくる。棚田は、そこから出てきた石を山側の矩り面に積んで崩

も風呂も、全部この湧き水。贅沢ですよ。ニジマスの養殖もやっています。

今上がつてきた谷間には、両側に約30ha、約600枚の棚田が広がっています。30haの棚田というと、九州では上から3番目ぐらいの規模です。『棚田100選の中で日本一私の家から近い棚田』です。略して、日本一の棚田」

久木野を過ぎて山越えすると、すぐに鹿兒島県だ。

この急な峠越えには、以前、国鉄山野線が走っていた。水俣久木野間は1934年（昭和9）に、久木野薩摩布計間は1937年（昭和12）に開通した。1988年（昭和63）に廃線になるまで、わずか50年ほどの間、地元の貴重な足として利用された。

水俣久木野間の廃線跡は、廃止後早々に撤去工事が進み、水俣駅起点で14kmの日本一の長さを誇る運動場となった。愛林館ではここで毎年、久木野しし鍋マラソン大会を開催している。

傾斜地のままでは耕作地がつかないから、一部を削ってその土を谷側に落とすことで平らな土地をつくる。棚田は、そこから出てきた石を山側の矩り面に積んで崩

も風呂も、全部この湧き水。贅沢ですよ。ニジマスの養殖もやっています。

今上がつてきた谷間には、両側に約30ha、約600枚の棚田が広がっています。30haの棚田というと、九州では上から3番目ぐらいの規模です。『棚田100選の中で日本一私の家から近い棚田』です。略して、日本一の棚田」

久木野を過ぎて山越えすると、すぐに鹿兒島県だ。

この急な峠越えには、以前、国鉄山野線が走っていた。水俣久木野間は1934年（昭和9）に、久木野薩摩布計間は1937年（昭和12）に開通した。1988年（昭和63）に廃線になるまで、わずか50年ほどの間、地元の貴重な足として利用された。



上は、石垣積み名人の寒川敦さんに指導をお願いして、石垣積み教室で積んだ幅13mの石垣。左は、高さ3m20cmの超高層石垣と沢畑さん。重機がない時代に、人力でどうやって積んでいったのか。想像もつかない大変な作業だ。左ページは、崩れた石垣を修復する霧島食育研究会の平島さん。ムエタイの達人でもある。愛林館が借りている棚田には、草刈り機としてヤギが大活躍。栄養が良いと双子を生むそうだが、1匹は育児放棄されているので人工飼育中。

れてこないように固めることでつ
くられる。
「こんな狭い土地にこれだけの石
が埋まっている、石しかないよう
な土地だったんです」

よく千枚田という言葉聞くが、

比喩ではなく、本当に1000枚
以上の小さい田んぼが連なる地域
もある。傾斜が急で1枚あたりの
耕作田を広くできないために、小
さな田んぼをいくつもつくること
で千枚田はでき上がる。景観とし

て美しいと感じることはたやすい
が、その背後にある苦勞にも思い
を至らせたものだ。

久木野の棚田は、1枚あたりの
面積が2a、約60坪。畳という
120枚ほどの広さである。農作
業には、田んぼから田んぼへと耕
うん機を出し入れしなくてはなら
ないが、その手間と危険性は、耕
作断念地に拍車をかけている。

「耕作放棄地という人がいますが、
放棄しているのではなく断念して
いるんです。耕作が続けられてい
る田んぼも、ほとんどはほかに勤
めを持った棚田サラリーマンの時
間とサラリーを注ぎ込んで維持さ
れています。実際、米は棚田でつ
くるより買ってきたほうが安くて
楽なので、『先祖からの田畑を荒
らしたらいかん』という棚田サラ
リーマンの善意に頼るのも、そろ
そろ限界だと思っています。

棚田は牛馬と人間が作業する時
代につくられたものだから、作業
道は狭く、田の段差が大きい。機
械を使うには不向きなんです。

石垣の段差の近くでは、牛馬も
人間も危険を感じて慎重になりま
すが、機械である耕うん機にはそ
んな芸当はできません。上下の棚
田をつなぐアルミ板の上を、耕う
ん機で後ろ向きに降りていくのは、
命が縮む思いです。

そもそも耕うん機は平坦地で馬

鹿力を発揮する機械。うっかりす
ると畦を破壊して下の田んぼに転
落してしまう危険があるんです」

100年もつ仕事

棚田に石垣積みの技術は不可欠。

石垣は一度つくったらおしまいで
はなく、水路からの水漏れなどで
崩れるものだから、手入れが必要
だ。だから今でも、70歳代の男性
はみんな石垣積みの技術を持って
いるという。

その中の一人、寒川敦さんに
指導をお願いして、石垣積み教室
を行なって、幅13mの石垣を新た
に積んだ。

「完成したときには表面しか見え
ませんが、立体で考えたときに、
それぞれの石が必ず3点で支えら
れるようにして置いていきます。
その際に、なるべく平らな面を表
の面にそろえるようにします。2
点は何とかなるけれど、3点目を
見つけるのがちょっと大変。奥の
ほうに石をかませたりして、支え
をつくることもあります。

大きな石は、ユニボを使ってワ
イヤード吊って下ろしますが、機
械がない時代には、本当に大変な
作業だったと思います。結構大き
な石もボールを差し込めば動くの
で、微調整できます。てこの原理
を使うと、大きな力が出るんです

ね。

これだけのものをつくと、達
成感があります。これなら、10
0年はずっと。なかなか100年も
つ仕事ってできないですよ。だ
から、すごいんです」

沢畑さんが久木野に来て一番実
感しているのは、このように10
0年でも残るであろう仕事に従事
できる喜びと充足感だ。それは石
垣にも造林にもいえることだ。

石工集団近江穴太衆は、戦国時
代に織田信長や豊臣秀吉の城の石
垣をつくったことで能力が高く評
価された。それ以降、全国の藩主
に召し抱えられたという。

「熊本では、はじめは加藤清正の
召し抱えた穴太衆が熊本城の築城
に協力したのですが、その後、細
川時代になると細川さんも自前の
穴太衆を召し抱えていたので加藤
家の穴太衆は地位を追われます。
その人たちが各地に散らばって
いったことで、熊本県内には石垣が
広く普及した、といわれています」

久木野には高さが3m20cmもあ
る石垣があって、特別な風格を持
っている。

「ここは、1924年(大正13)生
まれのじっさまが、『天草から指
導者が来てつくられた石垣だと、
うちのじいさんが言っていた』と
いうことなので、多分江戸時代に



つくられたと推測できます。これだけの高さを積んだお蔭で、の上には相当広い面積の田んぼをつくることができました。

コンクリートも重機もない時代に、人力で、身体と頭を使ってつくったのが棚田の石垣です。下手にコンクリートを使うと、コンクリートの寿命がきたらおしまいですから」

人工林の整備

樹齢5年ほどの杉の人工林に案内してもらおう。

「杉は日本で一番成長の早い樹木です。ここに植林されている杉は、材木にするので、上から下までなるべく同じ太さであることが望ましい。そういう理想的な杉を目指すために、なるべく光を当ててやりまます。

杉を植えるときには、1haに3000本。野球場はだいたい1haから1.3haですから、野球場ぐらいの広さの所に3000本の杉を植えると考えてください。
1haが何m²かわかりますか？1万m²ですね。ですから1坪、畳2枚分に1本ぐらいの割合で植えいでいくんです。

時間が経過すると枝が伸びて葉が茂り、鬱閉うつぺいします。そうなったから間引くんですが、そのタイミン

グは気象条件などに左右され、地域によって違います。この辺りですと、だいたい15〜16年ですね。林齢15年の小径木は、昔は足場丸太などに活用されていたんですが、今は需要がありません。コストが合わないために、間伐を行なわないか、行なっても切り捨てになつて、林内に放置される場合が多いのです。

それで私は『巻き枯らし間伐』という方法を広めています。

根から吸い上げた水や養分は、樹皮と木部の部分によって運ばれるので、樹皮をはがすと木が死んで立ち枯れます。その性質を利用して、腹巻き状に樹皮をはがし、立ち枯れさせる間伐方法です。

伐採は危険を伴うし、結構、労力がかかる作業。樹皮をはぐだけなら、半日で100本ぐらいに施せるから、軽減になります」

強間伐した（一時にたくさん木を間引く）場合に、風通しが良くなりすぎて、木が倒れることがある。巻き枯らし間伐なら、しばらくは間伐した木が立っているんで、風で倒れることを予防してくれるという利点もある。

しかし、沢畑さんによればせっかく巻き枯らし間伐をしているのに、わざわざ伐採して切り捨てている例が多いのだという。

「立ち枯れしている状態を『見た目が悪い』と感じるようです。伐採するのなら、巻き枯らしでやる必然性がないんですか。」

最初は1haに3000本植えて、最終的には700から800本までに減らします。ここまで減らしたら、あとはもうずっと置いておいてもいい。杉は成長が早いけれど、寿命も長い木なので、そのまま置いておいてもよく育ちます」

照葉樹林の森

次に連れて行ってもらったのは、皆伐した森林を放っておいて回復させた自然林。

「皆伐や山火事、火山噴火といった攪乱によって、いったん森林がなくなつて、そのあとにできた自然林を二次林といいます。原生林というのは、一度もなくならずに続いてきた森林のことをいいます。二次林も何百年もすれば原生林に近づいていきます。」

この辺りの二次林で最後に優勢になるのはシイ、カシ、タブの類いの常緑広葉樹。これらは暗闇に強い種ですので、落ちた実（ドングリ）が育っていき後継者になります。

空を見上げると、樹冠が鬱閉していますね。空いている所がありますが、それは台風で大木が倒れ



たためにできた空間です。そういう隙間を『ギャップ』といいます。ギャップができると、地表まで光が入ります。そうすると今度は光を必要とする樹種が大きくなれる可能性ができてくる、というわけです。あそここの光が当たっている所に、山桜とか針葉樹とか赤松なんかの種がもしもあつたら、大きくなるチャンスができてきたのです。台風のお蔭でね。

ドングリなんかは早めに腐りますが、それ以外の植物の種は結構長くもちます。弥生時代の遺跡から出てきた蓮の種を植えたら、芽が出て花が咲いたとか、ツタンカーメンの墓から出てきたエンドウ豆の種が発芽したとか、場合によっては何千年も生きるのです。

この辺の地面にも種はいっぱいあって、それらが今か今かとチャンスを狙っていて、ギャップができて光が射すと、地面の温度が上がって発芽します。いったんギャップに枝を伸ばして葉を茂らせると、光をたくさん浴びて大きく生長するから、ますます優位になるのです。

下から伸びるだけではなく、横からもギャップを取ろうと枝を伸ばしています。ですから、静寂の中で結構激しい競争が行なわれているというわけです。

今度は足下を見てください。こ

れは、ギンリョウ草という植物です。白っぽいですね。葉緑素を少ししか持っていないので、栄養はもっぱら根から吸い上げる養分だけでまかなっています。だから光はあまり必要ない。鱗のような模様があるから銀竜草。このように、自然の条件の中で適応できるものだけが生き残ります」

土壌

この日は、数日間、雨が降り続いたあとの久しぶりの晴れ間。沢畑さんは森の中の地面を掘って見せた。

「結構雨が降り続いたあとなのに、あまり地中は湿っていませんね。湿っていないということは、水が浸透していないということです。照葉樹の葉っぱが地表をマルチ（覆い）してしまっているからです。水源涵養力だけを考えた場合、この森にはあまり力がない。

落葉広葉樹の森には、下草がたくさん生えていますね。なぜなら、秋に落葉すると光が地表に届くからです。下草が生える森では、草の根が開けた穴を伝って、雨水が地中に浸透していきます。

ただ、森林は水源涵養のために存在するわけではありません。人間が勝手に機能を分けて考えているだけなんですよ」

若い森

愛林館で管理している森林は、現在21ha。その内の3.2haの地区にやってきました。

「ここも、もともとは照葉樹の森でした。国はこの照葉樹林を皆伐して、杉や檜を2回植えました。2回目の伐採を終えたのが14年前です。13年前に国有林と愛林館が分収林（他人の所有地を借りて、森を育てる）契約をして、植林しました。ある程度年数が経ったら皆伐して売り上げを分けます。貸与年数と分配率は契約時に決めます。この場合は、80年で30%です」

普通、分収造林といえば、用材になる樹種を植える。しかし、沢畑さんは奥山まで杉や檜を植えずぎたから、そうでない森をつくりたい、と考えた。

ここ九州は照葉樹林帯に属しているのですが、照葉樹は風土に合っている。ただ、全部照葉樹だと色気がないので、落葉広葉樹も植えているという。そのままでも森になる樹種を植えているから、別に放っておいてもいいのだが、草刈りとツル切りをした。これは、人間が手を入れることで、森林が生長する時間を短縮する作業である。

今年、25m四方の区画にどのような生物がいるか生態系調査を



右から、巻き枯らし間伐／葉緑素を少ししか持たない、不思議な植物ギンリョウ草／台風で木が倒れると、樹冠が開いて太陽光が差し込む。照葉樹林では、今、このギャップを巡って熱い戦いが繰り広げられているところだ／常緑広葉樹のシイ、カシ、タブと数種の落葉広葉樹を植林して13年目。森らしくなった「水源の森」／皆伐の跡と機械を入れるための作業道の痕跡が痛々しい山肌。



実施するそうだ。

「どれぐらいの広さを調査するかは、その地方で一番大きくなる木の高さに応じます。この辺だと、イチイガシが25mぐらいになるのです。本当は10m四方でやれば楽なんだけれど、律儀に25mでやります」

13年前はまったくの禿げ山で、木は1本もなかったという。

「広葉樹は落葉して枯れ木みたいな状態のものを植えるので、植林したばかりのころは、とても森とは呼べない様子でした。ここまで育って、大変うれいですよ」

まさに、100年残るであろう仕事である。

今日は取材なので駆け足でフィールドを回ったが、参加する人の興味に応じてテーマを選んで案内してくれる。企業研修で参加した人の中には意識が高い人も多く、沢畑さんが感心することも多いという。

独自の立ち位置

愛林館は、『水保市振興会』という地元団体が、市から委託を受ける形で運営されている。年間の運営費は、市から委託費として受け取る基本的な運営費（館長やパート職員の給料や光熱費などの固定費。年間

約600万円）と事業収益約1500万円とを合わせた2100万円。館長は、1994年（平成6）の

創立時に公募で選ばれた。愛林館は市の施設だが、沢畑さんは市の職員としてではなく、1年契約の団体職員という立場である。

観光産業として儲かったり、目減りしていく生業の代わりになることが、グリーンツーリズムの目的のすべてではない。愛林館も沢畑さんの館長としての立ち位置も、沢畑さんが描く目標を実践する場として、とても都合がいいのである。

実益だけではなく

沢畑さんが愛林館の館長に応募したのは、実践の場が欲しかったからだという。経歴を見ても、そのために歩んできた人生のようだ。小説や漫画だったら「設定が完璧すぎて不自然」と言われてしまうところだろう。

しかし、これらすべての経験が、今の愛林館運営にフルに生かされている。

沢畑さんが目指していることはいろいろあるが、近い将来不足するであろう食料や木材や水といった「生きるために不可欠なもの」を今から手当てしておくことが、一番大きな目的である。そのため

に、現存する棚田や森林の手入れを行なって、放置される土地を少しでも減らそうとしている。

「食料や木材や水が将来不足する」と考えるのは、人口爆発、地球温暖化による気候変動、円安による貨幣価値の目減りで輸入が難しくなる、という3つが大きな理由です。私が久木野で保全しているのは、棚田や森林ではなく、実は『生きるために不可欠なものを守る』という安心感なのです」

現代流ノアの方舟のようなこの考えは、沢畑流エコロジーの原則、「風土に合う」「循環させる」「自律する」「集中より分散」「分析より統合」、にもはっきり表れている。

応援団をつくる

新米館長が就任して最初の年は、檜林の下草刈りと除伐をして川で泳ぐという企画を立てた。ところが募集活動に出遅れて、テレビ局まで取材にきたのに、参加したのはわずか2名。

「しかし、久木野の人たちが『わざわざ福岡から交通費は使わずに家で下払いばしに來らした』と驚いたのは収穫でした。山仕事はきつい、と骨身に沁みているムラの人にとって、マチの人がお金を払って体験しにくるんだ、と気づくだ



右上：クレソンが溝にびっしり生えていた。農家の人には嫌われものだが、食べるとおいしい。タイ風の味つけで鍋にしてみた。
 右下：寒川水源。斜面から白糸のように水が湧き出ている。1日3000tの湧水量を誇る、大切な水源だ。
 左：水俣は、チッソが起こした公害の記憶を今も背負っている。農水産物に「水俣産」と謳うとイメージが悪くなる、と言われたのもその一例だ。愛林館はこうした問題をも解決していこうとしている。

地図：国土地理院基盤地図情報(縮尺レベル25000)「熊本、鹿児島」および国土交通省国土数値情報「河川データ(平成20年)、鉄道データ(平成20年)、道路データ(平成7年)」より編集部で作図

「皆伐後に放置されると、多様な木が育ってきます。その新芽は、鹿にとつてのご馳走です。鹿は栄養状態が良くなり、双子を生みまします。温暖化して雪が少なくなりましたから、冬でも食べものに困らずに生き延びる。それで、鹿が増えていきます」

「人工林は伐るために植えました。しかし、その伐り方に問題がある。林業の効率化のために、森林作業に機械導入を勧める政策も裏目に出ています。集材の機械を入れるために無計画につけた作業道が、土砂崩れを誘引しているからです」

「鹿も皆伐が関係している。最近、増えすぎが問題になっていく。鹿も皆伐が関係している。最近、増えすぎが問題になっていく。鹿も皆伐が関係している。最近、増えすぎが問題になっていく。」

「皆伐後に放置されると、多様な木が育ってきます。その新芽は、鹿にとつてのご馳走です。鹿は栄養状態が良くなり、双子を生みまします。温暖化して雪が少なくなりましたから、冬でも食べものに困らずに生き延びる。それで、鹿が増えていきます」

「人工林は伐るために植えました。しかし、その伐り方に問題がある。林業の効率化のために、森林作業に機械導入を勧める政策も裏目に出ています。集材の機械を入れるために無計画につけた作業道が、土砂崩れを誘引しているからです」

「鹿も皆伐が関係している。最近、増えすぎが問題になっていく。鹿も皆伐が関係している。最近、増えすぎが問題になっていく。」

「皆伐後に放置されると、多様な木が育ってきます。その新芽は、鹿にとつてのご馳走です。鹿は栄養状態が良くなり、双子を生みまします。温暖化して雪が少なくなりましたから、冬でも食べものに困らずに生き延びる。それで、鹿が増えていきます」

「人工林は伐るために植えました。しかし、その伐り方に問題がある。林業の効率化のために、森林作業に機械導入を勧める政策も裏目に出ています。集材の機械を入れるために無計画につけた作業道が、土砂崩れを誘引しているからです」

「鹿も皆伐が関係している。最近、増えすぎが問題になっていく。鹿も皆伐が関係している。最近、増えすぎが問題になっていく。」

「皆伐後に放置されると、多様な木が育ってきます。その新芽は、鹿にとつてのご馳走です。鹿は栄養状態が良くなり、双子を生みまします。温暖化して雪が少なくなりましたから、冬でも食べものに困らずに生き延びる。それで、鹿が増えていきます」

「人工林は伐るために植えました。しかし、その伐り方に問題がある。林業の効率化のために、森林作業に機械導入を勧める政策も裏目に出ています。集材の機械を入れるために無計画につけた作業道が、土砂崩れを誘引しているからです」

「鹿も皆伐が関係している。最近、増えすぎが問題になっていく。鹿も皆伐が関係している。最近、増えすぎが問題になっていく。」



見聞を広める旅

日本人は旅好きだ。江戸時代には、お伊勢参りや熊野詣、善光寺参りやお遍路さんといった巡礼がきっかけになって旅が発達した。巡礼といっても、五体投地でチベットのラサを目指す仏教徒や、イスラム教徒のハッジ（メッカ巡礼）のように禁欲的な苦行ではない。道中の楽しみを目的とした、いわゆる「物見遊山」の旅である。

従来型のマストツーリズムでは地域住民が翻弄されるといった弊害が生じたことも事実であり、近年、物見遊山を否定的に語る人もいる。しかし、生まれ在在所を離れることが稀だった当時は、見聞を広め、蒙（もう）を啓くチャンスだったのである。

水の力

人は、水の持つ根源的な価値を無意識に感じて、水辺に安らぎを感じるのかもしれない。

水の魅力は、そうした癒し効果を伴う自然景観以外にもたくさん

ある。温泉はもちろん、アクティビティの対象である海・湖・川・プール。米を筆頭とした農産物。魚介類や日本酒、豆腐、蕎麦といった食べものも、水が与えてくれた恩恵だ。

こうしてみると、水にかかわる旅—アクアツーリズムは、日本中どこにでも成立可能。アクアツーリズムになり得る資源は、どこにもある。

ところが、その価値に気づいていないか、わかっているも外に向けて発信していない場合がほとんどだ。熊本のように一丸となって発信しようとしているのは、先進例といえよう。

目的は美しい暮らし方

当センターでは、昨年（2009年）の交流フォーラムで「アクアツーリズム」をテーマに取り上げた。

他地域の人との交流は、地元にも埋もれた宝の再発見につながり、プライドの醸成にも役立つ。人々との交流がきっかけで、それま

で気づかなかった身近な宝を発見できれば、地域が活性化できるかもしれない。

しかしそれは、交流人口を増やして観光収入を得ることだけが目的ではない。そこに生きる人たちが水資源を愛し、活用することで、生き生きとした美しい暮らし方が実現されるのを願ってのことだ。そうでなければ、外から訪れた人に安らぎや癒しを提供できるはずもない。

フォーラムに続いて、今号の特集でも「アクアツーリズム」を取り上げたのは、単なるニューツーリズムの潮流としてではなく、そのような新たな価値観の構築に役立つのではないかと期待したからである。

今までは、川の上流である山間地で営まれる農業によって、結果として健全な水循環が維持されてきた。しかし、山間地の暮らしは、健全な水循環のためや景観を維持するために行なわれてきたわけではない。それらの生業が果たしてきた役割（公益的機能）は、結果として川の下流に住む人たちに

にも恩恵を与えてきたが、その恩恵は長らく意識されずにいたのが実状だ。

水にかかわる旅をすることで、健全な水循環を支えるたくさんの方のプロセスがあることを知る。アクアツーリズムは、下流に住む人たちが、上流に住む人たちに依存してきたことや、農業に公益的機能があることに気づくためのきっかけにもなるように思う。

阿蘇百姓村の山口力男さんは、雄牛と雌牛を群れで飼い、草原の草を自由に食べさせる、まったくの自然流畜産を行なっている。交配にも分婉にも、人は手出ししない。太らないから高値がつかないそうだが、牛はストレスもなく健康そのものだ。まさに「牛飼い」と呼ぶにふさわしいが、一般的な畜産とは大きな違いがあり、特殊なやり方とみなされている。

農作物の化学肥料や農薬には敏感になっているのに、現状では、人工的に育った食肉には無関心な人が多い。しかし、無関心でいることが、生産者の生活にも阿蘇の景観にも下流の水資源にも、影響

を及ぼしてしまう。

水が取り持つ縁

熊本大学の徳野貞雄さんは、崩壊の危機にある地縁、血縁に代わる新たな暮らしの基盤づくりとして、「知り合いを増やすことは大切だ」と言う。一歩進めて「友だち」になれたらもつといい。

昨今の口蹄疫流行の影響で、宮崎県へのふるさと納税（県外在住者が税金の使い道を指定して申し込むことができる制度）が急増。5月24日現在で、2009年度1年間の約6.7倍にあたる約2670万円が納税されたという。知り合いが困っていたら放っておけない人情の現れだ。

放っておけない知り合いをつくるには、訪ねていくことが前提となる。交流のないところには出会いも学びも生まれない。アクアツーリズムによって、未来に希望が持てる、水環考資産を増やしたい。



シリーズ里川 小金井市中央商店街「六地藏のめぐみ 黄金の水」
マイ蛇口を持って深井戸天然水を飲もう



JR中央線の武蔵小金井駅南口から、徒歩3分。小金井市中央商店街を過ぎ、小金井街道と連雀通りが交差する前原坂上交差点を左折すると、六地藏と井戸があります。

「商店街っていつでも、みんな通り過ぎちゃうよね。みんなが足を止めてくれる何かいい方法はないかな」と、商店街の活性化に悩む店主たちが集まって勉強会を始めました。小金井は「水と緑のまち」がキャッチフレーズだから、水か緑で何かできないか、と言いついたのがきっかけです。

緑といっても立地的に難しい。水も国分寺崖線は有名だけれど、湧いて出るのはもっと下の野川のほうだし、という話になって、みんなであちらこちら視察に行ったりしました。すると結構井戸があって、自噴していたりしたんです。それで井戸を掘れないだろうか、ということになり、小金井市中央商店街協同組合で管理していた六地藏の敷地に掘ることにしました。

六地藏というのは、1707年(宝永4)に奉納された笠付きの六面地藏尊のこと。前原坂上交差点は、かつて東西に延びる江戸道と南北の志木街道などが交わる六つの辻でした。

仏教では地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人間界、天界の六道があつて、人間はこの迷界を生まれ変わって輪廻転生するとされています。六つの辻は六道の辻と見なされ、人が迷わないように六地藏が祀られたのです。

浅井戸だと雑菌が入る恐れがありますね。不特定多数の人に利用してもらうためには、生の水を安心して飲める水質の井戸でなくちゃいけない。そこで小金井市と東京都から補助を受け、2004年(平成16)暮れに100mの深井戸を掘りました。

幸い、井戸掘削後1年に2回行なっている26項目の水質検査において「水質基準に適合」との結果を継続して得ています。硬度は145で、国内産の水としては珍しい中硬水です。石鹸はあまり泡立たないので洗濯には向



上：カフェ・ド・ペリーヌはゆったりとコーヒーが楽しめる。黄金の水を使っている店はペナントが目印。
左：黄金の水で仕込んだパンを販売する馬路音（ばろーね）。



上：小金井市経済課職員で小金井市商工会産業振興プラン推進室「黄金井（こがね）の里」支援担当の内田雄二さん。
右上：「六地藏のめぐみ 黄金の水」の登録事務を引き受ける、菊屋文具店の大久保昌弘さん
右：小金井市中央商店街協同組合理事長で亀屋本店代表の斉藤浩さん。和洋菓子の店亀屋本店では、湧水デザートとしてゼリーに利用している。



きませんが、茶道家などからは高い評価を得ています。浸透力と抽出力が高いことから、素材の味を引き出してくれる水です。

実際にこの水を使う飲食店もあります。パンやコーヒー、蕎麦のほか、商店街協同組合理事長の斉藤さんの和洋菓子屋さんはフルーツゼリーに使っています。

水を飲むだけでなく、プッシュ式の蛇口を押せば、コップ一杯の水が出ますから、誰にでも飲んでいただけます。もっとじゃんじゃん使いたい場合は、会員に。中央商店街の菊屋文具店で登録料500円を払えば、専用蛇口の水栓がもらえます。誰でも会員になれますし、市外の人も多いんですよ。2010年（平成22）3月現在で、登録利用者は3000人を超えています。

結構、ひっきりなしに利用者が来ますでしょ。毎日通ってくるうちに、健康になったよ、というお年寄りもおられるんですよ。杖をついてきたのに、忘れて置いて帰ってしまったらね。そういう意外な効果もあります。

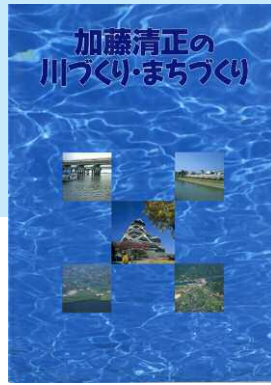
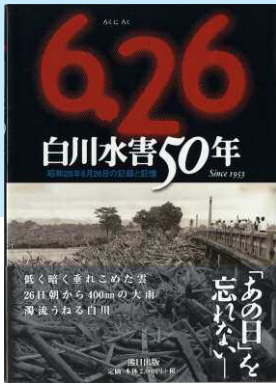
商店街に設置した石のお地藏さんも6体になりました。市内在住の作詞家星野哲郎さんが「365歩のマーチ」にちなんで命名した「しあわせ地藏」は、リュックサックを背負ったウォーキング姿。武蔵小金井駅南口から、市内をゆつくり巡っていただきたいという商店街の願いが込められています。

ここからは多磨霊園もほど近く。門前町には石屋さんがあります。地藏さんも、地元の石屋さんに協力してもらいました。地場の産業で活性化したいという気持ちの表れなんです。

小金井市は雨水浸透ますの設置率世界一を誇る町（2010年（平成22）4月の設置率53・4%、設置数5万8000基）。第3回日本水大賞において、グランプリも受賞しています。急激な都市化で減少した湧水を、なんとか復活させ保全していこうと目指してきました。

「水と緑のまち」がお題目で終わらないように、商店街も率先して頑張っています。





水の文化書誌 26 《熊本の水循環》

夏目漱石は29歳のとき、第五高等学校教授として熊本に赴任した。桃山様式の回遊式庭園や江津湖周辺の散策を楽しんだことであろう。漱石は水前寺公園の水景を眺め「湧くかに流る、からに春の水」の句を残し、また高浜年尾は「江津の水浮藻を流し止まざりし」と詠んだ。熊本県はいたる所で湧水に遭遇する。阿蘇山に降った雨は地下水となり、やがて伏流水として表われる。豊かな地下水を涵養する九州山地の広葉樹林帯を有する熊本県は、水源地や湧水群の宝庫である。肥後は「火の国」と言われるが「水の国」でもある。昭和60年選定、昭和の名水に轟流溪、

白川水源、菊池水源、池山水源が選ばれ、日本の水をきれいにする会編『平成の名水百選』（ぎょうせい 2009）には、水前寺江津湖湧水群、金峰山湧水群、南阿蘇村湧水群、六嘉湧水群・浮島の4地点が掲載されている。名水の書として、田中伸廣著『阿蘇山と水』（一の宮町 2000）、熊本日日新聞社編・発行『熊本の名水』（1998）、同『くまもと水と緑の百景』（1986）がある。嘉島町下六嘉の六嘉湧水群の中に、縦25m、横20m、7コースの天然プールがある。ローマオリンピック1000m背泳ぎで銅メダルを獲得した田中聡子さんは、中学時代この湧水天然プールで

練習を重ねた。阿蘇の湧水がオリンピック水泳選手を育てたといえる。数ある名水のなかで上益城郡御船町田代の吉無田水源を取り上げてみる。阿蘇外輪山の裾野にある水源で、吉無田の国有林地の伏流水と地下水が一緒になり湧水となっている。周囲に茂っている大木は、文化12年（1815）に当時の細川藩山支配役が、水不足解消の一大植林事業を興し、杉や檜などがうっそうと林立し、水を蓄え、それが八勢川に注ぎ、農業用水に利用され、村の人々の暮らしを助けた。2000年経たなくても役立つ。湧水量は一日当たり約1.3万t、水温14℃（水温は湧水地の温度と同じだという）、水質も良く多くの人が水汲みに訪れる。水源のそばには、道を隔てて「水神社」と「山神社」が祀られてあり、さらに「水神社」にお参りして、湧水を戴き、帰りには「山神社」にお礼をするという。

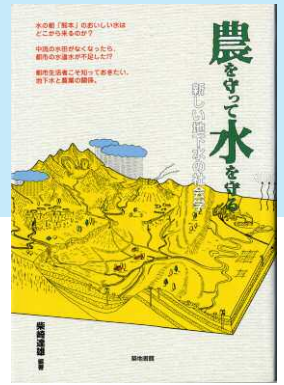
熊本の湧泉研究会編『水は伝える 熊本の湧泉』（熊本電波工業高等専門学校 出版会 2004）は、1984年から9年をかけて、県下の自然の湧水を対象とした調査研究書である。調査湧水は1333カ所、調査項目は、湧水にまつわる伝説・伝承、行事・風習、湧水の呼称の由来、利用現況、水質分析となっている。この調査では、お寺や神社以外に、多くの個人の家で使われている湧水も紹介されており、日常の生活用水に重宝されていることもわかる。水を使って、水を守る精神が生きている。ここで、熊本県の河川の姿を追っ

古賀 邦雄
こがくにお
水・河川・湖沼関係文献研究会
1967年西南学院大学卒業
水資源開発公団
（現・独立行政法人水資源機構）に入社
30年間にわたり
水・河川・湖沼関係文献を収集
2001年退職し現在、日本河川開発調査会
筑後川水問題研究会に所属
2008年5月に収集した書籍を所蔵する
「古賀河川図書館」を開設
URL: <http://mymy.jp/koga/>



てみたい。熊本県は九州地方のほぼ中央に位置し、人口は182万人を擁し、面積は7405km²、その内訳は森林62.7%、農用地17.2%、宅地4.8%、道路3.8%、水路・河川2.7%、原野0.1%、その他8.7%となっている。熊本県の北東部には、世界的なカルデラを持つ阿蘇山、南部には九州山地が広がり、これらの山地を水源とする菊池川、白川、緑川、球磨川は、それぞれほぼ東から西へ向かって流れ、有明海と八代海に注ぐ。八代海を挟んで天草諸島が連なり違うが、全体的に温暖多雨で寒暑の差は大きい。阿蘇の外輪山の渓流を集め、菊池渓谷を下り菊池平野を潤し、有明海に注ぐ菊池川、阿蘇根子岳に源を発し、豊富な湧水を集めて南郷谷を流れ、阿蘇谷を下ってきた黒川と合流し、熊本市を流下し有明海に注ぐ白川、熊本県のほぼ中央部を東西に横断して有明海に注ぐ緑川、九州山地を水源として人吉盆地、八代平野を流れ八代海に注ぐ球磨川の四つの河川である。

江戸初期に、加藤清正はこれらの四つの河川に対し、治水と利水事業を行ない、現在の熊本の町を形成した。清正是慶長12年（1607）熊本城を築き、その城や町を守るために、白川を付け替え、水門、堰を造り、土砂の流入を防ぐために、白川と坪井川を分離させ、洪水を減災させ、また坪井川には城を防禦する堀の役割をもたせ、舟運にも役立つように改修した。城内には120基の井戸を掘り、食用のための銀杏を植えた。



白川での治水、利水技術は堰を造り、その堰からの灌漑用水路には「鼻ぐり」という工法を用い、水勢で土砂が用水路に溜まらないように工夫されている。白川の downstream には石塘、石塘堰、二本木堰を築き、水量調節や水田保護を図った。菊池川では、河口玉名の干拓、横島小島石塘、唐人川改修、くつわ塘8カ所、船着場の工事を行なった。さらに緑川では、鵜の瀬堰の施工、御船川の付け替え、六門わんど（流土の沈降池）、杉島どんと（石造りの直線水壩）、たんたん落とし（乗越堤）、清正堤を築いた。球磨川では遙拝堰を造った。清正はこれらの工事従事者には男女の区別なく米や給金を支払い、労働時間を厳守させたという。清正の事業については、熊本城跡保存会編・発行『加藤清正の土木治水』（1936）、中野嘉太郎著『復刻版加藤清正伝』（青潮社1979）、矢野四年生著『加藤清正』治水編（清水弘文堂1991）、谷川健一編『加藤清正—築城と治水』（富山房インターナショナル2006）、熊本工務事務所編・発行『加藤清正の川づくり・まちづくり』（1995）に詳しく論じている。

菊池川の高瀬湊、緑川の河口川尻湊は米や小麦の物資輸送で賑わった。肥後米は有明海、瀬戸内海を通して大坂の米蔵に運ばれた。

井手堰で取水された白川の水は、白川中流域の灌漑用水として使われる。この水田はザル田であって、普通の水田の減水深は30mmほどであるが、110mm程にのぼる。この水量は地下水涵養となつて、地下水パイパスを通じて、砥川溶岩分布域の健軍・庄口水源地、江津湖、秋田水源地、浮島などに湧き出でくる。清正によつて開発された人工の地下水流である。清正によつて開田された白川中流域（大津町・菊陽町）にある約1500haの水田で使用された水、すなわち熊本の飲料・生活用水の100%をまかなう地下水は、そこから浸透水であることが判明した。水田における使用水量が熊本市民の命の水を左右することになる。現在減反政策により、地下水涵養量の減少が生じたため、その対策として、湛水面積をなるべく減少させない営農方式として、飼料イネの導入、ニンジン畑の湛水（水張り）が行なわれている。

策に迫っている。昭和51年3月熊本市議会は、次のような地下水保全都市宣言を行なった。「わが熊本市は豊かな緑と清冽な地下水に恵まれた自然の下生成発展を遂げて来たが、今日における無秩序な地下水の開発と自然環境の破壊は、今や地下水の汚染をはじめその枯渇さえ憂慮される状態にある。よつて、本議会は市民の総意を結集して自然環境の回復、保全をはかり、貴重な水資源を後世まで守り伝えていくことを誓い、ここにわが熊本市を地下水保全都市とすることを宣言する」。そして熊本市地下水保全条例を制定した。熊本県保険医協会編『くまもと水防人物語』（積書房1998）、熊本市環境保全局編・発行『くまもと「水」検定公式テキストブック』（2008）の書は、日本一地下水都市熊本をアピールするとともに、熊本市民の手によって、森と川と海の地下水を含んだ水の循環システムの健全化と持続性を図り、その行動を強調する。

中世から近世に向かつて、河川舟運が最も発達した時代であり、次のような書が刊行されている。それは、熊本県教育委員会編・発行『熊本県歴史の道調査—菊池川水運』（1987）、同『熊本県歴史の道調査—菊池川水運—資料編』（1987）、同『熊本県歴史の道調査—緑川水運』（1989）、同『熊本県歴史の道調査—球磨川水運』（1988）の書である。

清正は坪井川と白川を分離し治水対策を行なったにもかかわらず、その後もたびたび水害は起こった。1953年6月、西日本を襲った豪雨は白川を氾濫させ、熊本市内に大災害を及ぼした。白川の流路が洪水のため旧河川に流れ込んだ。総降水量は阿蘇黒川で880mmを超え、熊本市でも600mm近い記録的な豪雨で阿蘇の山肌は削りとられ、火山灰を含んだ泥水が市街地を埋めつくした。この未曾有の災害について、熊本工務事務所編・発行『濁流の中から昭和28年6月26日白川大水害体験記』（1995）、熊本日日新聞社編・発行『6・26白川水害50年』（2003）にその惨事を映し出す。この災害を機に白川は河川改修が進んだ。なお、坪井川については、柿本竜治編『坪井川とともにくらす』（成文堂2007）がある。

このように白川は、ときには流域の人々に害を及ぼすが、古来から農業用水の役割を担ってきたことはいうまでもない。そして、その水は還元されて下流域の熊本市における豊富で清浄な湧水をもたらし、水前寺・江津湖・浮島などの湧泉も地下水パイパスを通じて表れ、それがまた熊本市民の水道水として供されている。このことを指摘するのは、柴崎達雄編著『農を守って水を守る—新しい地下水の社会学』（築地書館2004）である。大津町上井手堰、下

熊本の水道は100%地下水でまかなわれているが、熊本市水道局編・発行『熊本市水道80年史』（2007）をひも解けば、その地下水の確保は苦勞の連続であったことが記されている。その恵まれた地下水は産業の発展に伴い次第に汚染が拡がり、過剰汲み上げの結果、水の減少をきたしている。くまもとの地下水を考える会編・発行『地下水からの警告—市民がつくった地下水の本』（1990）、朝日新聞熊本支局編『水は救えるか』（葦書房1989）は、熊本の水の汚染、枯渇の実態とその対

終わりに、熊本における農業水利として、本田彰男著『肥後農業水利史』（熊本県土地改良事業団体連合会1970）、熊本県編・発行『熊本県農業水利誌』（1974）、『砥川東部土地改良区史』（1976）、高田素次編・著『百太郎清史』（百太郎清土地改良区1993）、幸野清土地改良区編・発行『復刻 幸野溝』（1996）、矢部町・通潤地区土地改良区編・発行『通潤橋架橋150周年記念誌』（2004）を挙げる。

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

『くまもと水検定公式テキストブック』

日時：2010年10月15日(金) 13時30分～18時

会場：東京ウィメンズプラザ
東京都渋谷区神宮前5-53-67

水は誰のモノ？

公平と循環を両立するために



今、水ビジネスが大きな関心を集めています。地域の水循環の一部を担い、社会資本である水道事業においても、市場メカニズムと公共制度をどのように組み合わせれば利用者の公平と循環が両立されるのかが、解かれぬ問題として立ち現れています。

共有的な資源であり、「みんなのもの」であるはずの水。しかし現実には、水事業を持続的に運営するために、誰がどのように費用を負担し、どのような利用権が与えられればよいのでしょうか。

人口爆発が続く世界にも、人口減少が本格化する日本にも、「公平と循環を両立できる水事業」を可能とする水文化の構築が求められています。

本フォーラムでは、さまざま水文化の視点から「公平と循環を両立できる水事業」について討議します。

写真は昨年開催された、ミツカン水の文化交流フォーラム2009。
於：東京ウィメンズプラザ。

夏休み、子供たちと一緒に
ご利用ください

水探検ワークブック

『大切な水を探検』

ーもしも蛇口が止まったら？ー

当センターが作成した水のワークブック(小学生向け)です。詳細は事務局までお問い合わせください。

もしも蛇口が止まったら？
みんなで水を上手に使おう

大切な水を探検



みんなのまじやぶらの
水を探そう

ミツカン水の文化センター

問題提起

健全な地下水循環への取り組み 熊本県の事例から

小嶋 一誠 前熊本県環境生活部水環境課課長

日本と世界の水ビジネス 現状と将来

中村吉明 独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO) 研究開発推進部長

途上国の水道事情 開発援助の現場から

橋本和司 八千代エンジニアリング株式会社国際事業本部顧問

水資源は誰のモノ？ 水法の観点から

宮崎 淳 創価大学法学部教授

※氏名五十音順、敬称略

討論

公平と循環を両立する水事業と水文化とは

コーディネーター：沖大幹 東京大学生産技術研究所教授

登壇者：小嶋一誠、中村吉明、橋本和司、宮崎 淳

なお、プログラムは予告なく変更する場合がございます。あらかじめご了承ください。
本フォーラムへの参加申込は、2010年9月1日(水)より、
ホームページ (<http://www.mizu.gr.jp>) にて受付を開始します。

■水の文化36号予告

特集「愛知用水」(仮)

2011年、愛知用水は通水を開始して50年。地元民の発案を世銀融資で実現し、愛知県東部地域を戦後復興から高度成長期に移行させたナショナルプロジェクトでした。次号では愛知用水事業を題材に、高度成長期の流域開発とは何だったのかについて考えます。



水の文化 Information

『水の文化』に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水とのかかわり」に焦点を当てた活動や調査・研究などを紹介していきます。

ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究などの情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください

<http://www.mizu.gr.jp/>

水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページにてバックナンバーを提供しています。すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

編集後記

◆ 今回より参画させていただくことに！ 今皆さんの議論を聞くのみ。アクアトリズムって何？ と思いつながら言葉の響きの心地よさに幼きころ、尾張の田舎の川で遊んでいた風景を思い出していました(現実逃避か...)。(宮)

◆ 高速での移動手段がない時代、目的地までの道中そのものが旅であり、楽しみであったはず。時間をかけてその土地の風土や風景、風味に触れ、その土地の価値を実感する。道中を楽しむ暇がない現代において、水の流れは緩やかであり、トリズムに相応しい素材と思うが...。(新)

◆ 都会っ子の私。正直、水資源について真剣に考えたことがなかった。今回水源地を訪れ、そこで暮らす方々と交流してから、端切れで拭いてから食器を洗うように。「相手の顔を知る」トリズムの可能性を実感した取材だった。(松)

◆ 高校の修学旅行以来二度目の阿蘇。熊本城と草千里の記憶だけが残る。熊本がこれほど豊かな水文化を持っているという説明は聞いた記憶がない。日本の歴史観光もさることながら、水文化に触れる旅があってもよいのではないか。(ゆ)

◆ エコトリズム、アグリトリズム...。今度はアクアトリズムか？ と言われるかもしれないが、水循環のもたらす経済的・社会的な波及効果は「移動者の世界」に対しても予想以上に大きいのではないか。熊本のカースを読んで実感した。(中)

◆ 水は、時には命を育み、時には命を脅かす。そんな水が媒介になってつながった人々が暮らす地域には、命の鼓動が聞こえるようなエネルギーが感じられる。アクアトリズムとは、こうしたエネルギーを吸収する「パワースポット巡り」なのかもしれない。(緒)

◆ また訪れたいという場所はよくあるが、住みたいと思わせるところはなかなかない。熊本はそんな魅力を持ったところだった。もともと恵まれた自然環境が備わっているが、それを磨き上げた人の手が生み出した魅力ではないだろうか。(力)

◆ 日本全国(たまに海外も)、取材先は水にかかわりのあるところばかり。編集部の仕事は、まさにアクアトリズムの積み重ねだ。各地で出会う人たちの層の厚さに、日本もまた捨てたもんじゃない、と希望が湧いてくる。(賀)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化

第35号

ホームページアドレス
<http://www.mizu.gr.jp/>

※ 禁無断転載複写

発行日 2010年(平成22年)6月

企画協力 沖 大幹 東京大学生産技術研究所教授
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会
陣内秀信 法政大学教授
鳥越皓之 早稲田大学教授

編集制作 宮崎真次 新美敏之 松本裕佳 小林夕夏 中庭光彦
緒方大輔 原田朱野 賀川一枝 中野公力 賀川督明

発行 ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川1-22-15 茅場町中埜ビル9F
株式会社ミツカングループ本社 広報室内
Tel. 03 (3555) 2607 Fax. 03 (3297) 8578

お問い合わせ ミツカン水の文化センター 事務局

〒104-0043 東京都中央区湊1-13-2 アリス・マナーガーデン11F
Tel. 03 (3552) 7504 Fax. 03 (3552) 7506



ミツカン水の文化センター

表紙

上：水をたたえた田んぼが、眠りから目覚めて命を宿す。水俣市久木野ふるさとセンター愛林館が、2005年から毎年行なっている「棚田のあかり」。棚田が美しさで力強さを持つことを、見る者すべてが心に刻む祭りである。

下：地元の子供たちも一緒に働く。2000個の竹筒だから、着火用のたいまつも半端な数ではない。

裏表紙

上：筋ワークスの岡裕二さんが飛んでる！ここは、浮き島神社のそばにある馬洗い場。地面に衝撃を加えると、水底から泡が出てくるのがわかる。まさに浮島だ。

下左：「あかりの正体」。使用済みの天ぷら油を加工したバイオディーゼル燃料を使う。燃料を吸い上げるための芯は、棚田で穫れた稲藁。使い終わった竹筒は、炭にして棚田の土壌改良に。

下中：代掻きを終えた棚田の昼間の風景。

下右：今年の「棚田のあかり」助っ人は約50人。熊本大学の徳野研究室の学生が中心となって手伝いに来る。この交流から、美しいムラづくりが発展することが望まれる。

